
Dive

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dive

【Nコード】

N9524T

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

世界初のVRMMOその仮想世界の名前をヤーウエと言った。その世界を作り上げた一人の男。しかし世界は彼に優しくなかった。世界に愛されず、世界に恵まれず、そして世界に価値を見出せなかった男が送られた場所はその作り上げた世界、ヤーウエだった。

D i v e 1

世界を矮小に感じたことはないか？

己を納める器を、認めてくれる存在を求めたことはないか？

己の居場所に確固たる自信はあるか？

己の力に確固たる自信はあるか？

この世界は本当に己にふさわしい世界なのか？

問うても問うても解は得ない、それは結局己の中にあるのだから。

D i v e 1

それは長いプロローグ 初

生まれた時は両親はまだ優しくかったのではないかと、そう思う事がある。記憶には全く残っていないのだが、おそらく、いや、もしかしたら優しくかったのではないかと思うのだ。

何が気に入らないのか、何が納得いかないのかはわからないが、日に日に激しくなる暴力はどうしようも無く、生まれてきたことが間違いだったのではないだろうかと考えた事もあった。

6歳の時、ヤカンの熱湯をかけられ、右足の太ももが完全に爛れてしまい、酷い有様になった。酷い痛みで泣き叫び、足が全て溶けて無くなってしまったんじゃないかと思ったほどだ。皮膚に服が張り付き、移植手術を必要とするほどの火傷。お尻から皮膚を移植したその手術はおよそ3時間かかったと聞いている。歩けなくなるほどの後遺症を残したわけではないが、その後のリハビリはそれなりに地獄だった。なぜ俺がこんな目にあわなければならぬ、と、そう思ったのはその時が初めてだった。それまでは俺が全部悪いのだらうと考えていたのだが。

半年近いリハビリを終え、退院したが実家に戻ることには無かった。それが原因で虐待が発覚し養護施設に預けられることになったのだ。まあ、それが本当に良かったかどうかは分からない。ちなみにその火傷の跡は一生残るだらうと言われた。水泳は一生やる事は無いだらう。

中学生になった時、親が反省して迎えに来たという話を聞く。どうやら離婚したようで母親が迎えに来たと聞いた。以前のようにパ

チンコ三昧という訳でもなく、そして涙を流しながら謝り、そしてきちんと仕事もしているとの事で様子見も兼ねて一時帰宅が許された。許されたというのも変な話ではあるのだが。6歳の頃から考えて8年ぶりの自宅だったが、記憶にあるままと変わらずにそこであり、古ぼけた表札がどこか哀愁を感じさせた。

部屋に入ると優しく母が話を振ってくるが、正直7年ぶりの再会だ、何を話して良いのかすら判らない。距離感を図りかねている俺に気を使ったのかどうかは分からないが、御飯でも作るね、と言ってキッチンへ向かって行った。そういえば今まで母親の手料理なんて食べたことが無かったな、と何処か他人事のように考えていた事を覚えている。

出された料理はそれなりに美味しかった。これがお袋の味と言うのかどうかは分からないが、少なくとも食べれないような味ではないし、世間一般的に見れば上の下、くらいには美味しいのだろう。だがどうも無表情で食べていることを心配したのか引っこり無しに声をかけてくる。美味しいよ、とは言うのだがどうも信用してくれない。残念ながら6歳の火傷が切欠で感情がうまく表現できないと精神科の先生から言われている。それも当然母親には伝わっているはずなのだが、どうやらここまで酷いとは思って居なかったようだ。現実を理解したのか、ぼろぼろと泣き出し、ごめんね、ごめんね、と何度も繰り返し返していた。

中学生生活は根暗といわれても仕方が無い方だったかもしれない。そもそも感情表現があまり無い人間と積極的に関わろうとする人は中学生にはそう居ないだろう。悪質ないじめや暴力的なものこそなかったが、自然と壁が出来、はぶられるのは時間の問題だった。それに対して不満が有ったわけではないし、もともと一人で居るほうが好きだった。グループで集まって何かをしなさい、とか、修学旅

行なんかは多少困ったが、それでもとりあえず何とかなつてはいた。

中学生の時に嵌ったのがパソコンだ。結局一人で出来、そしてのめり込めた物がそれだっただけであり、最初に他に何らかの一人で出来る事に出会っていればそちらに嵌ったかもしれない。とにもかくにも、部屋に閉じこもり画面を見ながら力チ力チやり続けていたのは、今思い出してもそうとうに怖い光景だったかもしれない。

そんな中学生時代も終わり、高校生になる。母親との関係も改善されてきて、普通に母さんと呼べるようになったのもこの時期だ。最初に読んだ時とても嬉しそうにしていたその顔は今でも忘れられない。ようやく俺たちは親子になれたんだろうな、と思った時でもあった。

ただ、まあ高校生活でもさほど俺の生活態度は変わらなかった。生活態度と言うよりは人間性だろうか。別に暗い訳ではないのだが、皆と騒ぐことにさほど興味を持たなかったし、こう熱血的な感情や感覚もいまいち理解できなかった。いや、まったく理解できなかったわけではないのだが、積極的にその輪に入ろうとは思えなかった。中学生と違って高校生はそこそこ大人な人間も居た為孤立する事も無かったが、変な奴、程度の認識はされていたのだろうな、と思う。

高校生でもパソコンからは離れられなかった。その内ハッキングやクラッキングの技術を習得したのもこの時期だ。別に悪事に使うつもりは全く無く、単純に興味本位から覚えただけ、プログラム技術もこの時期に学んだ。好きこそ物の上手なれ、ではないがまるで吸い込んでいくようにそれらの知識は覚えられた。残念ながら籠りつきりだったのでひよろつとした体格になってしまったのは止むを得ない。母親からさすがに少し運動しなさい、と言われたので最近朝マラソンをする事になっているが何日続くかは疑問だ。母親から

指摘ではないが、そういつた小言を言われるのがとても嬉しかったことを覚えている。小言を言われているのに喜ぶなんて別にマゾヒストでは無いのだけでも、そう言った事を言える関係になれたと言うのは大変ありがたい事なんじゃないかな、って考えていた。

高校2年生になったその年、別れた旦那、要するに俺の父親が尋ねてきた。学校から帰ってきて母親に声をかけ、鞆を自分の部屋に置いた所で玄関から怒鳴り声が聞こえたのだ。何かと思って顔を出すとそこにはおぼろげながら覚えていた父親が居たのだ。俺の顔を見ると直ぐに怒鳴り声をかけてくる。一体今更何なのだ、と。近所迷惑になるから帰ってくれ、と母親が言うも、迷惑か？ 父親が迷惑か？ 俺の存在が迷惑なのか？ ああ？ と態と大声で叫びだす。警察を呼びますと言うとようやく引き下がった。最後にまた来るからな、と言う言葉が耳に残っていた。

焦燥した母親が俺に大丈夫だから、と言うが、明らかに大丈夫ではない。どう考えても母は今にも倒れそうだ。とりあえず横になって、と伝え、念のために警察に連絡を入れる。しかし、最初は悪戯か何かと思われた挙句、何かが起こらない限り警察は動けないと言う。市民を守るのが警察の仕事ではないのか、と思ったが、結果的には巡回を増やすから、程度の話で終わってしまった。ふざけてる、本当にふざけてる話だ。

その後数日は特に問題なかった。だがしかし5日後、またあの男は現れた。無理やり玄関の扉を開けて部屋の中に入ってくる。押しとめようとする母親を投げ飛ばして壁にぶつけた所で頭に血が上った。怒声を上げて殴りかかったのだが、結局の所パソコンの前にかじりついている貧弱な体、簡単に殴り飛ばされた。殴られた頬が燃える様に熱く、そして眩暈と吐き気がする。足に力が入らなく、あんなに怒り狂っていた気持ち冷めていくのが手にとるように分か

った。母が慌てて俺の傍に駆け寄り心配するが、正直母も壁に思いつきり叩き付けられていたのだ、俺より自分の心配をして欲しかったのだが、口の中が切れていたのか、舌を噛み切ってしまったのか変な言葉しか発せれなかった。

そんな俺に向かつてはかな餓鬼だ、と笑っている男が視界に入る。自分にこの男の血が半分も流れていると思うと本当に死にたくなつた。どうしようもないほどに嫌悪感が全身を覆った。なんで、なんでこんな奴が。あの時直ぐに動いていればあんな事にはならなかったかも知れないのに、けれどその時の俺はただ、ただ心の中で喚くだけで指一本動かさそうともしなかったのだ。

ゲラゲラと笑う男に母が文句をつけて、出て行つてと何度も悲鳴のように叫ぶ。その返答は煩いの一言と殴りつける拳。悲鳴を上げる母親を見ても俺は指一本動かさなかった。殴られた事で体が言うことを聞かなかつたのだろうか？ いや、そんな事は無いだろう、俺はただ怖かつただけだ。殴られるのが、また殴られるのが怖かつただけだ。体にしみこんだ虐待の恐怖が体を縛り付けていたのだらう。

段々とエスカレートしていく暴力も俺はただ見ていることしか出来なかつた。色々な罵声を浴びせながら母を叩くその男は、結局の所金、そう金が欲しいようだった。ならそうだ、金を渡せば帰ってくれる、きつと帰ってくれる。そう考えた俺は、金縛りに会っていたかのように動けなかつた体を必死に動かし、母が溜めていた通帳を探し出し、そして持つてきた。これを渡すから帰ってくれと、もう母を殴らないでくれと、そして二度と来ないでくれと。その貯金は俺が大学にいけるようにと母が溜めていた金だった。でも俺にとつてはそんな物よりずっとずっと母のほうが大事だったのだ。

その言葉を聞くと満足そうに満面の笑顔を貼り付け俺から通帳をひったくり、その額面を見て口笛を吹いて喜んでいる。ようやく開放された母の傍によると、なんで、どうして、と聞いてくる。あなたが、あなたの将来の為に溜めていたのに、と。でも俺はもうそんな物より母が居ればよかった、そう母さえ居ればよかったのだ。そう話すとぼろぼろと泣き出して謝られた、なぜ母が謝る必要があるのだ。悪いのはあの男だ、そうだすべてはあの男が悪いのだ。

今だ居座るその男に向かってさっさと出て行ってくれと告げると、はいはい、と笑いながら部屋を出て行った。そして玄関を開けて外に出た後、こちらを振り返り一言発した。その言葉、その景色、その時の気温から声の音質から全て、そう全てはつきりと今でも覚えている。彼は言ったのだ、じゃあ、また来るな。と。

その時一気に血液が沸騰するのを感じた。ああ、きっとこれほど怒った事は無いのだろう、絶対そう確信できるほどあの時の俺は全身を覆う怒りを感じていた。こいつは駄目だ、きつと、きつと一生俺達に付きまとう、折角、折角本当の親子になれたのに、こいつが居るから、こいつが居るから駄目なんだ。だから、こいつを、消すしかない。

その後は良く覚えていない、キッチンから包丁を取り出し、玄関を閉じようとしていた男を呼び止め一気にその腹に向かって突き刺した。が、そうは簡単に世の中は進まない、そこで、そこでその男を殺していればよかった、本当にきつちりきつかりきちんと殺しておけば良かった。

右わき腹に刺さったその包丁を視界に納め、力なく倒れる男を見る。ああ、これで、これで幸せになれると振り向き母を見る。呆然とした目で此方を見ている、ああ、そうか、そうだよな。人を殺し

てしまった、そう、殺してしまった。でもごめんなさい、俺にはもう我慢できなかった、あなたがこれ以上苦しむなんて俺には許せなかったんだ。ぼろぼろと涙が零れて視界が歪んでいたのも良く覚えている。そしてその数秒後、驚愕に目を見開き、慌てて俺の傍に駆け寄り覆いかぶさるように俺を抱きかかえてくれた事も、良く、覚えてる。

ドス、という鈍い音が聞こえる。しね、しねええええという声と共に、何度も何度も鈍い音が聞こえる。母から赤い液体がどろどろと流れてきて顔にかかる。母の顔を見ると微笑みながら、そして、その微笑んだままの口から血がドロリと垂れて、覆いかぶさっていた俺からずるりと玄関の床へ倒れた。呆然とそこを見ると腹部を押しさえながら包丁を振り下ろしていたのである。男が視界に入る。なんで、どうして、何で、なんで、なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで、いったいなんでこんな事になっているのか。

ざまあみろ、と言いながら今度は俺に向かって包丁を振り下ろそうとしてくる。なんで、なんで、なんでこいつが生きてるの？ 振りかぶり肩に刺さる包丁、しかし痛みは感じない。血に濡れたその男の腹部に、その切れ目に親指を押し込む。悲鳴を上げて手に持っていた包丁を放した後、ずぶりと自分の肩から抜き、そしてその男の顔面に突き刺した。そう、何度も、何度も、何度も、何度も。

そう、何度もだ。

D i v e 2

ハッキングとクラッキングとは、前者はコンピュータシステムやネットワークの動作解析、そしてプログラムの改造を意味しており、後者は悪意もしくはそれに準ずる意志の元、不正アクセスやシステム改変、そして操り破壊する様なことを意味している。

しかし一般的には広まっておらず、後者の意味としてハッキング、そしてハッカーと呼ばれることが多い。

ハッカーは高度な知識を有し、その技術だけで一流企業からオフアーが来る人間もいるくらいだ。

表面上は犯罪者として逮捕されたとしても、司法取引でクリーンな企業の裏で働いていることもある。いや、その可能性もある、とだけにしておこう。

D i v e 2

それは長いプロローグ 間

両親が死んだ後、いや俺にとっては両親は母親だけなのだが。男の亡骸はそのまま放置して、母親を背負い、病院に向かうことにした。幸か不幸か病院までここから歩いて直ぐの距離、救急車を呼ぶより早いだろうと俺は急いだ。なぜそう考えたのかは分からない、そして母親がもう帰ってこないことも既に理解していたというのに、なぜそう考えたのかも分からなかい。それは未だに残る疑問でもある。

病院に着いたら直ぐに騒ぎになった。それなりに夜中ではあったが文明の進んだこの国では夜中の10時でも普通に外を歩いている人は多い。歩いている時から騒ぎになっていたのだ、病院について看護師から先生からと大慌てでストレッチャーとやりに乗せ、そしてすぐに、止まった。告げられたのは一言、残念ですが。

ああ、まあそうだろうよ、そうだろう、そんな事は分かっている。ああ、分かっているさ。

はは、と乾いた笑いを上げた後、母の顔をもう一度見る。まるで穏やかに眠っているかのような母は今にも起きてきそうで、でも触れたその体温はととても冷たくて。そして始めて俺は泣いた、

周りで肩の傷の治療を早く、と騒いでいるのだが、正直そんな事は如何でも良かった。されるがまま注射を打たれ、気が付いた時には意識を失っていた。

目が覚めたのは次の日。ぐるぐるまきの肩口を見てため息を付いた後、病室に入ってきたのは刑事と名乗る男だった。当然だろう、俺の家の玄関口で大量の血痕その上死体が転がっているのだ。時間も時間だし犯人は明確だろう。現行犯逮捕ではないが、現場証拠と証人も居る事で病室での逮捕とあいつた。ガチャリとかけられた手錠が物凄く冷たく感じられた。手錠を嵌める前、事情を話したらある程度の情状酌量の余地は有るだろうとの事、それと母親の葬儀には出させてくれるそうだ。当然刑事同席の元だが。しかし母は身寄りの無い状態、もはや肉親は俺しかいない、祖父母の事は全く話に聞かなかつたし、どうなるのかさっぱり分からない。その辺は刑事さんが説明してくれるそうなのでその通りにしておけば良いだろう、とりあえず何かを考えることが億劫でしようがなかった。

母の葬儀はこじんまりとした物だった、というより葬儀と言って良いのか疑問に思うほどだ。遺影に移っていた母の笑顔を見るとどうしようもなく空虚に囚われ、そして後悔に見舞われた。何をやっていったのか、本当に何をやっていったのか。どうして母が死ななくてはならなかった、どうして、どうして、どうして、どうして。そう、俺がきちんと殺しておかなかつたから、俺がきちんとしなかつたら母が死んだ。そうだそれがすべてだ。乾いた笑いが漏れる、両脇に控えていた刑事が怪訝な目で見てくるが知ったことではない、そうだ、俺が全て悪い。だが、どうしてこんな目にあう？俺が、母が何かしたのか？俺が悪いのは認めよう。だが、貴様らも悪い、何もせず、ただ見ているだけで、差し伸べようともせず、ただ見るだけで、そうだ、この世間も、この世界も、この国も悪いのだ！その歪んだ復讐心は、その歪んだ反骨心はこの時宿ったのだろう。

落ち着かぬ心の平穩を保つ為に必要だったのだろう、壊れてしまいそうな心を支える為に、砕けてしまいそうな精神を保つ為に、何かを恨む事を糧とし、生きていたのだあの時の俺は。

火葬が終わり骨壺と化した母を抱え、両脇にいる刑事に母の骨を海に撒きたいと告げる。何処の誰とも知らない墓の隣に、まるで引き出しの様な場所に収められるくらいなら、そしてこんな窮屈な国の中に居るくらいなら、きつと海で世界を回るほうが良い。俺のせいで仕事に明け暮れ、俺のせいで死んでしまった母にせめてもの旅行を。

「りょうちゃん、高校卒業したら旅行に行きましょう。そうね、北海道なんてどうかしら？」

「仕事は良いのかよ」

「大丈夫大丈夫、りょうちゃんの為なら2、3日休んでも平気よ」

さらさらと流れていく砂のようになってしまった骨、風に撒かれ、風に乗れ、そして海へと染み込む様に消えていく。絶壁の端で、両手から飛ぶように離れていく骨粉を見つめ、そして全部撒き終わった後、後ろに控える刑事に告げる。

「ありがとうございました」

最後の微笑み。そのまま足を後ろに、そして崖から飛び降りた。

物凄い激痛が体に走る、水温が低くなかったのがせめてもの救いと、あちらこちらにあった岩にぶつからなかったのも救いだ。正直

ぶつかって死ねばそれはそれで母に会えるな、と思っていた所もある。ともかくにも死んではいけない、そして意識も失っていない。上手く足から垂直に飛び込んだつもりだったが、この貧弱な体では耐え切れなかったようで全身の激痛が酷い。むしろそのお陰で意識を失わなかったのかもしれないが、今度はその痛みで意識を失いそうになる。だがここで倒れるわけにはいかない、俺はこの世界に復讐するまでには倒れる訳には行かないのだから。

だがしかしその数分後に意識を失うことになる。何処を如何流れたのかは分からないが、次に目が覚めた時は質素なベットとコンクリート剥き出しの壁。ああ、刑務所に戻されてしまったのかな、と思ったが机のうえに置かれている黒光りする銃と、それに備え付けられている椅子に座る厳つい男を認めて認識を改めた。俺、攫われたのかもしれない、と。

結論から言うとそう言うわけではなかった。その男は某国の捜査官であり、俺を助けたのは偶々の偶然であるとの事。むしろ捨て去る気満々だったが、その手についている手錠の関係で使えるかもしれないと持つてきたそうだ。使えないなら突き出せば良い、使えるならそれで脅して使えば良い。と、そう言う訳だ。生憎と使われる気も無かったし、こんな得体の知れない野郎の言いなり等真つ平ごめんである。ふざけんなどばかりに唾を吐きつけ、殺すなら殺せよくそが、と伝えると内臓を握り潰されたかのようなボディブローが突き刺さった。

その後は滅多打ちだ、顔の原型が無くなるかと思われるほど殴られ、ようやく終わったかと思った時、何か出来る事があるなら殴るのを止めてやろうと言われた。もはや数回気を失うほど殴られたというのにさらに殴るといふのかこの男は、ふざけるな、どいつもこいつもふざけるな。もはや痛く無い所を探すのが到底不可能だろう

と思われる体を動かそうとするが、ピクリとも動かない。だからせめて動く口で答えてやった。Fuckと。その後の記憶は無い。

これは後々聞いた話だが、最後の台詞のお陰で気に入られたらしい。意識を戻した俺は、1週間ほどまとともに飯を食えなかった。その後俺をしこたま殴ってくれた男は兵頭と言った。とある組織の一人だそうで、先日と同じく貴様は何が出来ると聞いてきたので、コンピューター関係なら得意だと伝えた。答える気は無かったのだが、さすがに顔の横にナイフを突き刺されて抵抗するほど俺は凶太くなかった。昨日しこたま殴られたのも効いていたのだろうが。

その後すぐにどれほど使えるのか試すと言われ、隣の部屋に連れて行かれた。そこには数名の男がたむろしており、色んな野次を飛ばしてくる。さっさと殺してしまえとまで言ってくる男も居たので、そいつの顔をしっかりとおぼえておく事にした。渡されたPCは最新機種であり、開くとアイコンが表示されパスワード画面が出てきた。要するにこいつを解け、と言ったところだろう。正直拍子抜けだ。空きスペースで解析ソフトを即席で作り上げ、およそ2分でパスワードを認識、綺麗にバラしてやった。これでどうなんだ、とばかりに振り返ると部屋が静まり返っていた。そして暫くした後兵頭と名乗った男が馬鹿みたいに笑い出した。これも神の思召しか、と。神だと、ふざけるなそんな者がいるなら俺が真っ先に殺してやる。ギリ、と奥歯をかみ締め吐き捨てる。返ってきたのは威勢の良い餓鬼だ、と、一言だけだった。

この組織には2年ほどいた。いや、正確には2年しかいらなかったか。その2年で俺はかなり有名なハッカーになれた訳だが、どこその中央情報局に突き止められ逮捕されたというわけだ。俺が所属していた組織は簡単な話テロリストだ。驚くべき話だが、日本海を漂っていた俺をボートで偶々引き上げたそうなのだ。最初に起

きた場所はすでに海外だった。今更ながらに思うが、捜査官なんざ良く言ったものだ。もの見事にその敵対してる所だったじゃねえか。逮捕される時、目の前で脳髓をぶちまけた男に内心で恨み言を言う、正直すでに過去の話だから如何でもいいのだが。

俺も銃殺か、死刑かね、と思っていたら司法取引を持ちかけられた。どうやら今までの実績を高く買ってくれたらしい。若干19歳で情報局のサーバーに進入し、そして形跡も残さず情報の抜き出しをしたり。監視システムの画像の入れ替えから、Nシステムの改竄。さらに航空会社の名前修正等々。ネットワークが有る所に不可能は無いと言われるほどの功績を残していた。良いことではないので功績ではなく悪行と言うべきだろうが。どちらにせよそのハッキング能力とプログラミング能力を買われて司法取引との事だそうだ。そしてこの時俺は出会う、きっと、最初で最後の愛を教えてくれた人と。

「あら、まだ全然ボウヤじゃない」

「シャリー、油断するな。彼はあのナイトキラーだぞ」

「くすくす、また大層な名前をマスコミは付けたものよね。私から見ればただのボウヤよ」

「ふう、まあ気をつける。彼の能力がああ計画に必要だとしても必須ではないのだ。危険を犯す必要は無い」

はいはい、わかりました。と返すその女性、ブロンドのウェーブがかかった髪をバストトップほどの長さで切りそろえており、目の色はブルー。少しきつめに見えるその顔もその美しい目の色で幾分和らいでいる。彼女の名前はシャリー＝リファリオット。VRシステム

△技術開発部門 A I システム設計開発局の局長である。

最初はこんどは色仕掛けか、と思った。思ったとおりに告げ、目の前でストリップしてくれたら考えても良いぜ、と言ったら平手打ちが飛んできた。とんでもねえ女だ、さらにその拳句、見たいなら私を口説き落としてみなさいと来たもんだ。まったく、交渉ごとにもういてねえんじゃねえのか、と思わなくてもない。生憎と死なないのならそちらの方が助かるので司法取引に不満はない。だがつまらない事をやらされる、そして過度な監視は勘弁してもらいたいと告げる。彼女からの返答はイエス。ただし此方の望む実力があれば、との事だ。

テストは無事合格、なにも問題はない。あえて問題があるとすれば保護観察者が彼女である事だ。俺が何かすれば彼女に迷惑がかかる、それは別にどうでもよかったのだが……。

「刑務所卒業って所かしらね？ 気晴らしに旅行にでも行く？」

時間が止まる、彼女の顔がだぶって見える。もうこの世にいない誰かの顔と。

「……仕事は、いいのかよ」

「あら、構わないわよ。貴方の為なら二、三日休んでも大丈夫でしょ」

「……そうか、いや、それはまたの機会にしよう。あんたの名前、なんだったか？」

「失礼ね、シャリーよ。シャリー＝リファリオット。一応貴方より

5つは上なんだから敬いなさい。それと見えないかもしれないけど、私も天才って言われてる一人なんだからね」

少しだけ、そう少しだけ泣きそうになった。けれどそんな資格は俺には無い。もう俺には無いのだ。

D i v e 3

VR (virtual reality) システム。ヴァーチャルリアリティそれは仮想空間を現実と見せる技術。

それはつまり、人工的に現実感溢れる世界を、コンピュータグラフィックスや音響効果を組み合わせ、作り出す技術の事。

そのVRの構成要件としては何点か重要かつ必要な点が存在する。人工的な現実感を与えるというのが簡単に指しあらず表現の仕方だが、それだけでは映画等でも該当してしまう。

その為、必要とされる要件は、体験が可能となる仮想の空間を構築する事 (virtual world)。人間の感覚器官、五感に働きかけ、得られる没入感 (immersion)。対象者、あるいは被験者の位置、そして動作に対する感覚へのフィードバック (sensory feedback)。対象者、あるいは被験者がその仮想空間に存在している世界に働きかけることができる対話性 (interactivity) の4つとされている。

VRシステムは基本的に、入出力機器とコンピュータを組み合わせて構築されている。バイクのヘルメットではないが、頭全体を覆う(場合によっては視界のみ)ヘッドギア、ヘッドマウントディスプレイを取り付けることで仮想空間を視覚的に表現する事が出来る。

また、触感などをあらわすために、手を覆うグローブの様なものを取り付け、まるでそこに物があるかのように圧を加え、抵抗を表し、感覚に訴えるシステムも存在している。

D i v e 3

それは長いプロローグ 終

彼女、シャリーは自分で言うだけあり、たしかに天才であった。AIシステムの天才であり、彼女の成果を見せてもらったがその反応性能、記憶媒体、対応能力、ありとあらゆる面で現存する技術を超えていた。当然所々改善点はあるのだろうが、何も知らない人間がこのシステムと話したら、最初は普通の人間と対応していると思うだろう。当然暫く話していればボロも出るのでアレなのだが。

今回俺が組み込まれた組織、いやチームはAI局ではなく、プログラミング部門だった。一体全体何を作りたいのか、と聞いた所、彼等は世界を作るのだと言っていた。正直意味が分からない。世界を作る、いや世界を作って何がしたいのか？ 世界を作って何を

られるのか？ はなはだ疑問だった。しかしいろいろ話を聞くに俺でもなんとなく理解できた。俺が、いや俺達が作り上げるのは仮想世界、そのメリットとして一つは軍事利用。

弾薬代もいらず、そして場所代もいらず、そして実践に近い形での訓練が可能。次は医術転用、青を知らないものに空の青さを、花を知らない物に花の美しさを。脳波に直接刺激を送るシステムを取り入れればこれも可能になるであろうとの事。そしてこれはまだいまいち理解できていないのだが、人間の脳の開拓、だそうだ。正直医学知識は殆ど無いので聞き流したが、どうやらこの部分と、そして最初の部分がわりかし重要らしい。

とりあえず俺は与えられた仕事をする。俺が担当するのは世界の構築。VRシステムに関しては別部門が行うそうで、なんか巨大な卵状の置物が大量のコードを繋げてチカチカと点滅しているのを良く見る。どちらにせよ俺が担当している世界が完成しない事にはアレの出番も無いそうなのでせっつかれた。犯罪者である俺に対する態度はどうなんだかな、と思っていたが、実力を示すと直ぐに馴染めた。いや、馴染んでいたと言えば語弊が有るが、少なくとも非協力的でハブにされるといった事は無かった。なんだか拍子抜けだ、そして同時に仕事に打ち込んでいる俺を省みて苦笑する。あれだけこの世界に対して恨んでいた気持ちも収まってしまった。それはこの仕事のせいかな、それともシャリーのせいかな。

彼女とは良く話した、スタンダートで小馬鹿にしたしゃべり方の俺に付き合ってくれる彼女は貴重だった。会ってから2年、だいぶ俺の話し方も柔らかくなつたのだろうけど、よく付き合ってくれるものだと思う。20歳を超えた俺は良く彼女と酒を飲みにも行った、そしてそのままなし崩し的に関係が始まったのもこの時だ。まぶしい朝日の中で微笑む彼女は本当に美しかった。そう言ったら顔を真

っ赤にして照れていた。それすらも可愛いと思う俺はどうにもすこし壊れてしまっているようだ。

技術開発は物凄いスピードで進む。俺が作り上げた世界、その世界の名前をヤールウエと名づけた。シャリーにしようか？ と聞いたら割と本気で殴られた、そこまで怒らなくても良いと思うのだが女性にはわからない。AIシステムもかなり出来栄が良くなり、もはや完璧と言っても良いだろう。普通に人と話して居る事と相違ない。彼等をAIでは無く人と呼べる日も近いだろう、そう話すとシャリーは悲しそうな顔をしていた。機械を人とは呼べない、そう呼べる世界ではないのだと。

そして完璧な彼女のAIシステム。そして俺の作り上げた世界、ヤールウエでの始動が始まった。卵形状のVRシステムに入り込み、内部調査を行う。画面に表示され流れていくログ、それを見ながらヘッドギアを頭に被り、目を閉じる。そして唱える、ログインの為の一言Dive^{ダイブ}と。

直ぐに肉体が若干の浮遊感をおび、その世界に降り立つ。作り上げた世界は中世程度の文明を持っており、そして多種多様な種族が居た。まさにファンタジーである。どうしてファンタジーの世界にしたのか疑問だったのだが、このシステム、MMOとして売り出す予定との事だ。Massively Multiplayer Online世界中の人々がここにアクセスし、遊ぶ為のゲームツールとするのだと。つまり、そう、3つ目の理由、脳内開拓、それを世界中の人間を利用してやろうとしているという訳だ。

彼女は明確にそれを言わなかったが、言わなくても流石にわかった。これだけの投資をしているのだ、ただのゲームで終わるはずが無い。安全性は当然図られるし、危険は無いのだろうが、知らない

所で脳を弄られるのだ、好き勝手に。俺がそうならとてもではないが我慢できない。しかしたかが一介の職員、なにより元犯罪者、さらに言えばシャリー以外の人間がどうなるかと知ったことではなかったのだ。ただ、ただ少しだけ、悲しそうな顔をしている彼女が脳裏から離れなかった。

満を持してゲームは始まる。世界的に、革新的に、革命的に、個人でも取り扱うことが可能なレベルにまで単価を抑え、サイズを抑えたVRシステムが普及されていく。そうして世界中の人々はその世界に入るのだ、Dive^{ダイブ}と唱えて、己が実験体にされていること知らずに。

「シャリー、俺達も弄られているのだろうか？」

「どうかしらね、おそらくメインサーバに直で繋いでるし大丈夫じゃないかしら」

「だと良いんだがね」

正式サービスが始まる1ヶ月前、内部の最終メンテナンスの為、俺とシャリーはヤーウエの世界にログインしていた。俺はヒューマン族、そして彼女はエルフ族の女性の外見をしていた。世界に広がる予定のヤーウエ。それは他の追隨を許さぬ麗美な景色と合衆国と同程度ほどの広大な大陸、そして綿密に練りこまれたストーリーとシステムを既に作り上げている。

その世界には4つの種族が存在し、8つの代表的な職業が存在していた。

まず種族は、ヒューマン、エルフ、シャーマン、ドラゴニックである。

ヒューマンは平均的なステータスを有し、汎用性に優れる。
現実世界に居る人間とほぼ変わりはない、あえて言うなら筋肉質
である、くらいだろうか。

エルフは魔術的特性が高く、呪術師、そして召喚師が適性職と言
われる。

長い耳を持ち、線の細い体と、背が高めなのが特徴的。

シャーマン（ワーキャット、ワーウルフ）は、敏捷性に優れ暗殺^{アサ}
者、狙撃者^{ボウファイター}が適性職。

獣人族と言われる種族、猫耳や犬耳が付いており、背が低めなの
が特徴的

ドラゴニック（龍人族）は、筋力、そして体力に優れており、騎
士、そして重戦士が適性職である。

強靱な肉体と大柄な体格、そして頭に生えた角が特徴的。

他に神聖術士、バッファ（補助呪文）や回復呪文を得意とする
職業と、格闘家^{モンク}と呼ばれる武器が無くても戦うことが出来る職が存
在している。どの人種であろうとどの職業にも付くことができ、あ
くまで適性であり絶対でもない所がこのゲームの特徴である。また
サブ職業と呼ばれる職業も存在し、それがまた深みを増す原因の一
つでもある。

そんな世界の中に開発者の二人が立っていた。

「それでどうすんだ？」

「どうするもこうするもシステムチェックよ。この1ヶ月は殆ど寝

れないと思いなさい」

何言ってるの？ とばかりの顔で此方を見る。そのくびれた腰に手を当て、胸を張ってえさる。胸の大きさはリアルに比べて明らかに大きい。詐欺か？ と言ったら蹴られた、酷い話だ。それよりも酷い話を言っているのだが。ふつふつと湧き上がる怒りを抑えきれず思わず怒鳴る。

「あゝ あ？ おいおいふざけんじゃねえぞ、酒は！ タバコは！」

「酒はゲーム内にあるわ。睡眠は最悪VRシステムの中ね。トイレの時だけログアウトを許すわ」

そんなもんは感覚的な味であって実際に摂取してるわけじゃねえだろ、と思わず叫びそうになる、だがそんな事よりも言いたい事があった。とりあえず出来栄えを試しに見に行きましょ、とVRシステムに無理やり押し込んだその彼女に。

「てめえこの野郎嵌めやがったな！」

「はいはい、貴方も責任者の一人なんだからしっかりやりなさい。しかし貴方のその顔とかどうにかならぬの？ まるでどこぞのマフィアよ？」

そう、リヨウの顔は左目にかかる傷跡に顎鬚が生えており、そしてオールバックの髪。髪はおそらくこのVRシステムなら降ろそうと思えば降ろせるのであろうが……。なぜ美形揃いの顔テクスチャを使わずにそれを選んだのか疑問である。たしかに味のある顔といえはそうなのだが。

「見た目はほつとけ！　　というか犯罪者を責任者にするてめえらの神経を疑うわ！」

本当に疑う、心の底から疑う、だがしかし責任者な事には変わらない。いいからさつさとやるやる、と元気一杯の彼女に再度ため息を付き、まあしかたがないか、と思いつながらシステムチェックと言う名のゲーム遂行を進める事にした。

このゲームは先にも述べたが職業が8個ある、ちなみにテストは4名。俺と彼女以外は他の町からスタートしているそう。そのため各自2個づつの職業テストを行うことになっている。俺はとりあえず格闘家と召喚師にした。召喚師はシャリーも取りたかったそうだが、呪術師と神聖術士で我慢するそう、我慢するって何だ我慢するって。他の二人は重戦士と狙撃者、騎士と暗殺者というよくわからないバランスの組み合わせになった。俺は感性で選び、彼女はやりたい職を選び、あとの二人は仕事だから別に何でも、という感じだった。むしろ後者二人が正しい解答だろう。

ちなみにヤーウエの世界では代表的な街が4箇所存在する。それは各種族の始まりの街とも言われ、そして最大の都市とも言われている。正直成長する世界なのでいつまでもそうとは限らない所では有るのだが。

ヒューマンが統治する城塞都市　ヴァルファニア
シャーマンが統治する湖月都市　ジルコニル
ドラゴニックが統治する乾燥都市　グランヴァス
エルフが統治する深緑都市　ボルドーザ

以上4つである。当然ながら小さい村や町は他にも多数存在しているが代表的なのはその4箇所だ。各プレイヤーはこの大都市の近

くの村からゲームをスタートさせる。簡単なレクリエーション、戦闘の心得などの注意点を案内役のNPCから受け、そして近くのフィールドやダンジョンで最初に選択した職業レベルを20にしたらこの大都市へ向かうのだ。今回はそのレクリエーションをショートカット、大都市のクエスト確認をするのが主な目的だ。それに加えてレベルアップ作業といったところか。

テスターのためレベルアップ速度は通常の10倍に設定されている。最初は100倍の予定だったが、あまりにも早いと穴を見つけないかもしれない、との事でこの数値に収まった。

「戦闘システムの確認はほぼ終わってるけどリョウはまだやったこと無かったわね？」

「ああ、このフラストレーションをぶつけれるなら大歓迎だがな」

あら頼もしいわね、とくすくすと笑いながら先を歩いていくシャリー。ちっ、と舌打ちをした後彼女の後を付いていく。その後戦闘訓練とスキルの説明、そしてとりあえずレベル100までのクエストチェックを行った。どうにもこうにも嵌められた感が抜けないが、彼女が楽しそうにしているからまあ、良しとする事にしよう。

D i v e 4

ヤージュエの世界は数え切れないほどのスキルがある。その数およそ1万種類。しかし覚えることが出来る数、いや習得しておけるスキルの数は限られており、そのなかで取捨選択をし選ぶ必要がある。

ツリー状になっているスキルもあるため、厳選し選ばなければならぬ。対人用のスキルから狩り用のスキルなどさまざまな所からだ。唯一例外となるのは採集や裁縫、調理、鍛冶、などのサブ職業と言われる職のスキルであった。

お陰でWikiは大変膨大なページ数となり。開発元の彼が整理し、すべて丁寧な解釈を付けなければ、その膨大な数に投げてた者も居ただろう。まあその彼も彼女に無理やりやらされたのだろうが、それを活用する立場からすれば大きな問題ではない。

しかし、Wikiに書いてある情報は全スキルの内7000個までしか記載されておらず、残り3000個は各プレイヤーの探究心を刺激するには十分であった。今後これらが網羅されるかは神様、仏様、廃人様、といった所だろうか。

それはともかくとして、所持する事が出来るスキルは限られていた。レベルが一つ上がるごとに得られるスキルポイントは1個だけ。また職によっては使えないスキルもあった。だがしかし、このゲームの特徴としてカンストした職業は引継ぎできるという特色を持っていたのだ。つまり職業レベルを最大まで引き上げた後にマスターという称号を得る事が出来る。そして別職業に転職、その際、以前の職業のスキルを引継ぎ、そして使用も出来るのだ。尚、カンストする前でも転職は可能だがその職業ごとにレベルは1に戻される。

たとえば神聖術士で100まで上げ、その後呪術師に転職すれば、Lv1に戻され、神聖術士のスキルは使えない。だが、神聖術士をカンストまで上げてマスターの称号を得てから、呪術師に転職すると、Lvは1になるが、神聖術士で得たスキルを使用出来るという形だ。当然そこまでの道のりは遠く険しく、開発者たる彼等が言うには、おそらく全職業カンストできるものは居ないだろう、との事だった。

ちなみにこのゲームのカンストレベルは300である。つまり全職業を極めたとしても300×8の2400個。1万個あるスキルの中で4分の1程しか取る事が出来無いと言うことである。

D i v e 4

それは長いプロローグ了

結局1ヶ月缶詰状態でみっちり調べ上げ、もとい叩き込まれた世界の仕組み。途中からやけくそになっていた俺は格闘家モンクのマスタークラスを取得、さらに召喚師もマスタークラスを取得、そして呪術師に手を出した所で試験期間は終了した。最初の2週間は10倍経験値だったが、ラスト2週間は100倍取得にしたのが大きかったところどころのバグが発見されて色々修正が必要だったりしたが、とりあえず予定通りサービス開始となりそうだ。そして予定通り人体実験の開始と言っわけだ。

テスト期間の終わりが近づくにつれ、どんどんテンションが落ちていくシャリーを見ているのはなんとも言えない気持ちになる。所詮個人に過ぎない俺達に出来ることは少ない、そう言つと寂しそうに笑う彼女だった。おそらく最初無駄にテンションが高かったのも、俺を無理やり誘ったのも支えが欲しかったのかと自惚れで無ければ思ったりもした。

そして始まるサービスの当日、特に問題もなく進んだそのゲームサービスは瞬く間に世界中に広がりそして世界中の人を虜にさせた。とある国ではAI相手に結婚式を挙げると言っただ。中毒症状が酷い為規制がかかった国もあり。一時期国際問題にもなった。そして同時に進んでいく裏の世界、脳細胞、脳領域の研究。見てみぬ振りをしていても、それがいつか自分に牙を剥く、世界とはそういうものである。

サービスが開始されてから3年、一人の死亡者が出た。原因は不明、ショック死と言われているがそれはあくまで世間に公表された通知。本当の原因はVRMMO、その脳システム開発の負荷によるものだった。不幸だったのはその死亡した男性の名前がアラン＝リ

フアリオット。彼女の弟だった。

「シャリー……」

「リヨウ、ごめんなさいね。ふふ、本当に、本当に愚かね私は……」

「……」

「私が殺したようなものよ、分かっけて、分かっけて止めなかったのだから。分かっけて手伝ったのだから」

雨の降りしきる葬式、黒い礼服に身を包んだ彼女はいつもより一回り小さく見え、そして、そして昔の俺に被っけて見えた。だが、俺は何も出来なかった。もしかしたらそこで何か、そう何か彼女の心の支えになるような事を言えていれば、また何か変わったのかも知れない。

その後彼女は何をしているのか分からない時間が増えた、風の便りでは有るが宇宙開発局の人間と接点を作っけて何かをやっけているようだ。最近全く彼女と会う事も無くなっけてしまい、心配していたが依然として続くゲームのフォローに追われ、あまり気を向けてやれなかった。そして運命の日はやっけてきた。

「リヨウ！ シャリーを見なかつたか！」

非常回線でかかっけてきた電話を取ると同時に聞こえる声。明らかに慌てた様子で喋っけており、何かがあつた事は明白だ。

「いや、見ていないが。何かあつたのか？」

そう答えると直ぐに、すまない、見つけたら至急連絡をくれとだけ言われ電話を切られた。何か嫌な胸騒ぎがして彼女に電話をかけるが繋がらない。より一層嫌な予感が高まる。机の上に置いてあるPCを立ち上げ監視システムにハッキング、すぐに研究所内の捜索に当たったがどこにも見つからなかった。まさか外出を、と思ったが外出履歴には名前が無い。そこで思い出したのが宇宙開発局の話

まさかと思い宇宙開発局にハッキングし、内部監視カメラで探すと、いた。そこにはコンソールの前で何かを打ち込んでいる彼女の姿が見えた。

「何をしているシャリー」

ぜえぜえと息を切らして宇宙開発局衛星シャトル部門の一室にたどり着いた俺は、閉じられていた電子ロックの扉をシステムハックして空け、そこに居たシャリーに声をかけた。

「リヨウ、か。さすがね、まさかこんな短時間で見つけられるとは思わなかったわ」

「嘘を付け、それなら監視カメラをどうにかすればよかった。監視カメラシステムに何の細工もしていないなんてお前が本気で隠れようと思つているとは思えない」

全力疾走で疲れた体を壁にもたれ掛かせて、未だにコンソールをいじる彼女に問いかける。

「ふふ、本当に、さすがねリヨウ」

「一体、何をしている？」

どうも様子がおかしい、残像が見えるほどの速度でコンソールの

上を彼女の細い指が走っている。

「弟を、蘇らせるの」

「なに？」

その声は、暗くて、冷たくて、そう、まるで昔の俺のように。

彼女は、いったい、何を、言っている？

「ふふふ、弟を蘇らせるの。さあ、これで終わったわ、衛星シャトルはあと数十分で射出される。もう誰にも止められない」

くるりと振り返った彼女の眼は狂気に彩られていた。ああ、気付いてやれなかった、俺は、俺はまた助けられないのか、いや、違う、そうだ。俺は元々人を助けるなどと言う資格など無かったのだ。

警告音が辺りに響き渡る。さあ、あとは私の研究室で最後の仕上げをしなければならぬ、そこをどいて頂戴と。そう話して来る彼女に俺は一步も動けなかった。

ああ、ああ、ああ、なにをやっている、本当に何をやっているんだ！ 彼女が去った方向に向かって走り出す、研究室に行くといっていた、ならば、ならば彼女はそこに居る。駄目だ、あの彼女を一人にしてはいけない、止めなくては、止めなくてはならない。階段を駆け上がり、廊下を走る、だが、だがしかし、彼女の部屋まで後少しと言うところで警備隊の兵士に捕まってしまった。

「動くな！ 両手を頭の上に、そして床に伏せる！」

自動式拳銃の銃口を此方に向けながら怒鳴りつけてくる。必死に所属と名前を告げるが意味がない。冗談じゃない、こんな所でとめ

られている暇は無い。

「貴様！ 俺をこんな所で拘束して責任問題になったらどうしてくれる！ 貴様の所属と名前を言え！」

「黙れ！ 緊急警報が鳴っている状態でその様な戯言に耳を貸すわけがあるか！」

くそ、やはり駄目か、こんな時に無駄にしっかりしていなくても良いのだが。心の中で悪態を付くが状況は変わらない、どうしたものかと考えているとその兵士の無線から聞こえた声が入る。

『こちら、シャリー＝リファリオットは発見できず。発見次第射殺せよとの命令に変更との事だ』

その声を聞いたとき目の前が真っ赤に染まった。さきほど部屋のロックを空けるために使ったノートPCを顔面目掛けて投げつける同時に怯む兵士、その隙を見て廊下の曲がり角へ駆け抜けて行く。すぐに後ろから鳴り響く銃声、兆弾の音と、火花が視界の端に映る。冗談じゃない、銃撃戦なんざ、組織壊滅の時以来だが、こんな所で死ぬつもりはない。そして、彼女も殺させるつもりはない！

走り抜けた先の非常ベルを叩き割り、スイッチを押す。うしろで非常防火扉が閉まっていくのを音で確認した後、彼女の研究室の前にたどり着く。運がいいのか、悪いのか、自分の持っていたカードキーで開いたその扉の中へ滑り込んだ。

「シャリー、悪いが鉛玉を食べる趣味はねえんだがな」

すべりこんだ俺の目の前には拳銃の銃口を此方に構えたシャリー

が立っていた。

「もう少しだったのに、本当に困ったものね」

くすくすと笑う彼女は本当に俺の知って居る彼女だろうか。今にも消えそうなくらい儂くて、そしてその目は俺を見つめていた暖かい眼差しではなく、冷たく、黒く、何も映していない。

「一体何をするつもりなんだ？」

「そうね、最後だし教えてあげるわ。弟の脳細胞データ、そう、あのゴミ共が負荷をかけて調べ上げた弟の脳内データ、それを手に入れたの。苦労したわ、本当に苦労した。ふふ、それをね、それをヤーウエに入れるの。AIの上書きシステムとして。そうすれば弟の記憶を持った生命体が誕生するわ。それはもう弟に相違ない、そう、弟なのよ！ 私が、私が殺してしまった、私が殺してしまった弟を、だから、だから私が……！」

バン、と拳をドアに叩き付ける。力加減すらもう出来ていないその拳は鉄製の扉に負け、血が滲んでいる。

「そしてね、今度はあのゴミどもに触れられないように、絶対に触れられないように宇宙空間に飛ばすのよ。ヤーウエの世界のバックアップはこのスパコンに保存されているわ。およそ全長100mの機械だけど、それを衛星に積み込んで空に上げるのよ。宇宙空間なら誰も邪魔できないでしょう？ この世界では無理だったけど、でもあの世界が好きだったアランだもの、きつと気に入ってくれるわ」

ふふ、ふふふ、と笑う彼女。どうして、どうして、俺は彼女を支えられなかったのだろうか。ああ、今度もそうなのか、結局俺は救えないのか、結局俺は、このザマなのか。くそつたれが、どいつもこいつも、本当にどいつもこいつも勝手に生き過ぎだ。俺が、俺がどんな思いでいるかも知らずに！

「ふざけんな馬鹿女が、脳味噌くさってるんじゃないのか？ てめえが天才だって？ ざけんじゃねえよそんな腐った思考回路なんざ野良犬にでも食わせてしまえ！」

「なっ、う、うるさい！ 良いから黙って見てっ

」

チュイン、銃声が響く、彼女の声と同時に銃声が廊下から響く。そして強烈な熱を腹部に感じる。ああ、くそつたれ、冗談じゃねえ、このタイミングであほじゃねえのか。ゆっくりと下を見ると腹部からドクドクと赤い赤い血があふれ出ており、鉄製の扉には数個の穴が空いていた。

『居たぞ！ ここだ！』

『ロックを！ 早くあける！』

騒がしい声が空いた穴から聞こえる。へっ、舐めんなよくそが、てめえらの思い通りになると思うなよ。

え……、あ……、と急に挙動不審になるシャリ。俺の腹から出て行く血を見て顔面蒼白になっている。そんな彼女を横目に作業台においてあったPCを掴み扉の近くに戻る。呆然と立ちすくむ彼女に扉から離れるように指示、そして備え付けてある電子ロックに接

続した。

くっくっく、はっははは。舐めるなよ凡人共……。ナイトキラ様の
様のお出ましだぜ。

ポン、とエンターを叩く。そして流れるようにキーボードを打ち
続ける。どんどんと流れていく血液、指の感覚が無い、体の感覚が
無い、ああ、それでも、それでもいいさ。今だ呆然と此方を見てい
るシャリーに声をかける。

「さつさとやれ、弟を蘇らせるんだろ？ 悪いが俺もそう持たない、
一応研究塔のシステムは掌握してこの扉も俺が死んでから2、30
分は開かないはずだ。対戦車ロケットでも持ってこられたら別だが、
まあ、あの狭い廊下で使うことはないだろうし、一応非常シャツタ
ーも全部下ろした、バーナーを持ってこることも暫くは不可能だろ
う」

ツツ、と口元から垂れる血を拭いてもせず、話し続ける。キーボ
ードに血が垂れるが、もう目もぼんやりとしてきており画面が良く見
えない。ああ、まったく、本当に、くそつたれな世界だったぜ。

そして彼は息絶えた。

最後に聞こえた言葉は、駄目なおねえちゃんでごめんなさい、だ
った。

D i v e 5

本当に、本当に愚かだ、ああ、なんでこんなに愚かだったんだ。私は死んでも良かった、私は死んでも本当に良かった、なのに、なのになんであなたが死ななければならなかったの。どうして、なんで、あなたが死ななければならなかったの。

ノートパソコンを抱えて息絶える彼を見つめる。少しずつ下がっていく体温がその死を明確にしている。外では変わらず激しく怒声と銃声が響いている様だ。ああ、だめだ、本当にだめだ、私は、本当にだめな女でだめな姉だった。

彼の頭にVRシステムのヘッドギアを被せる。そして接続されたコンピューターが彼の脳内記録、データ、そう全記録をプログラム化していく。時間にしておよそ15分ほど、扉が破られる前に十分に間に合う。銃弾もしくは貫通しないだろう、彼が起動した防災システムで扉の前後が鋼鉄製の扉で覆われてしまっている。

完了のシステムメッセージを確認した後、彼をヤーウエの世界に転送する。ごめんなさい、私の我侷でごめんなさい、それでも私は貴方に生きていて欲しい、それが本当の生かどうかは分からない。そして私の贖罪、そうただの罪滅ぼし、私が楽になりたいから、それだけの理由でごめんなさい。

そして最愛の弟、いいえ、最愛はリョウにあげてしまったから最愛じゃなくなっちゃったけど。でも、今から行くから、今から謝りに行くから許してね。

リョウのデータがヤーウエに転送され、そしてチャトルが発射さ

れる。その全てを見届けた後、彼女は持っていた拳銃を米神に当てた。同時に彼が工作していたシステムも破られ部屋に警備兵が入ってくる。

そして彼女は告げる、最後に一言。

「愛してるわりョウ」

パン、という乾いた音が一つ、部屋に響いた。

木製の部屋、その部屋の中に暖かい日差し入る。部屋に備え付けられているベットに横になる男の体を暖かく包んでいる。良く天干しされた香りが鼻を付き、その居心地のよさに再度深い眠りに付きそうになるが何とか頭を覚醒させ、体を持ち上げた。

「ぐ、くう……」

全身に残る違和感。痛みは確かに無いのだが幻視痛の様な錯覚に襲われる。そして思い出す研究室での一件、頭が一気に覚醒し、バツと体を起こす。まるで壊れたブリキ人形のように周りを見渡し、そして……。

「あの大馬鹿野郎がつ！」

備え付けられている窓がビリビリと震えるほどの大声で叫び、怒りに任せて振り下ろした拳は、寝ていたベットを叩き割った。記憶が正しければここはヤーウエの世界の宿屋、ロットンの宿屋の一室。サービス前にテスターとしてゲームシステムを確認した後、ログアウトした場所だ。その後一度もログインしていないので間違いないだろう。おそらく今の俺は、ヤーウエでのゲームキャラクターであるアイスとなっているはずだ。死ぬ前の彼女の言葉が正しいのであれば、だが……。

「お前が、お前がいない世界にいたって、意味がねえだろうがつ……」

うずくまりポツリと呟く。馬鹿野郎が、本当に、大馬鹿野郎が。泣きそうになる所を必死に堪え、左手の甲を二度叩く。そこに現れるのはシステムコンソール。ログアウト表記を確認するが、黒く表

記されており、何の反応も無い。おそらくだが、俺の脳内データを転送したのだろう、となると彼女の弟も転送されているはずだが、思ったところでメールボックスが点滅している事に気が付いた。

メールボックスを開くとそこにはシャリーからの外部送信メールが入っていた。震える手でそれをダブルタップする。ポン、と軽快な音を鳴らして手紙が開かれる。目の前に広がる文章、そこには謝罪の言葉と、そしてアランの代わりに俺を送ったことが書いてあった。どうしろと、お前は、俺をこの世界に閉じ込めて、監獄ではないか、地獄ではないか、一体何を前は望んでいたのだ。ただ、最後に書いてあった、どうしても貴方に生きていて欲しかったと、例えばそれが生物学上の死であっても、私の我侷だったとしても、そして最後に一つ、私の子供達をお願いと、我侷な女でごめんなさい、と書いていた。

ああ、ほんとうに、くたばれくそ野郎。涙を流しながらお願いしている彼女が目に浮ぶ、そしてその彼女にとりあえず頭突きをくれてやる事にした。ふざけんな、このボケがっ！

はあ、とため息を付き天井を見つめる。とりあえず、泣くかな、と思いい涙が流れていくのを感じる。どうしてこう、俺が愛した人は皆居なくなるのだろう、母も、そしてシャリーも、それも俺のせいだ、俺が力足らなかつたばかりに。くく、また世界に対する恨みが沸々と沸いて来る、笑わせる、本当に笑わせる、ただの八つ当たりじゃないか本当に。このベットしかり、大人になれない子供のままだな俺は。

手の平を目の前にかざす。記憶にあるリアルな体とは少し違い筋肉が程よく付いたその体は多少の違和感を持っているが、その腕を、手を、指を見ているとテスターで動かしていた時の記憶が思い出さ

れていく。そしてその時はいつも隣に彼女が居た、そう彼女が居たんだ。

「シャリー、本当に、一発殴ってやりたいよ」

ぼそりと呟く、あの大馬鹿には一度大きな灸を据える必要があったんだ、と今更ながらに思い出しているところ、部屋にかけていたローブがもそもそと動き出す。あん？ とそこを見るとピョコツと小さな生き物が顔を出した。たしかあれはサポートシステムの一つで妖精族のフェアリーだ。身長およそ20cm程度の大きさで、背には半透明な蝶々の様な羽が付いている。髪はブロンド、シャギーにカットされたその髪はさらさらと、そしてローブに包まっていたからなのか後頭部が一部ハネている。それを両手で必死に押さえてハネを直そうとしている、が……。

おかしい、俺はあんなサポートシステムは持っていないなかったし、持っているとしたらシャリーが可愛いからって持っていたのを記憶しているくらいで……、と考えていた所、疑問顔で直立していた俺に向かってその妖精がしゃべりだした。

「ちょっとリヨウ、あ、エイスカ。女性を殴るのは駄目だって何度も言ってるでしょう？」

ハネがなならないわねえ、とぶつぶつ喋りながらそのたまった。とりあえず、空気が凍った。

「お前が、お前がない世界にいたって意味がねえだろうが。ですって奥さん！」

「てめえ……」

小さな手を口にあててオホホと笑いながら声をかけてくるフェアリーの彼女。ああ、そうだ明らかにこいつはあいつだ、シャリーだ、間違いない、断言できる、とりあえずミシミシと音を鳴らせながら強力なデコピンをかましてやるうと思っただ俺は悪くない。

「いったあい！ あのね！ こっちのシステムは世界に普及されたものと違って痛みもあるんだからやめてよね！」

「やめてよね、じゃねえよこの馬鹿女！ 一体全体どうなってやる」

デコピンを顔面にぶちかまされたシャリーことフェアリーの少女はおでこを両手で押さえながら抗議してくる。半泣きになっているその顔からどうやら本当に痛みがあるようだ、正直そんな事は如何でも良いのだが、現状の説明を求めたい。

「うーん、予想だけど。私はアランのために作られた存在でしょうね、いえ、それであればこの記憶媒体はあれだから、最後に修正を加えたのかな？ 私の全データを転送するにはデータ量が多すぎて時間内に終わらなかつたし、回線もパンクしちゃう状況だったみたいね。このサポートシステムで作られた妖精タイプに転送するのが精々だったって事。ちなみに今の私AI知識とか殆ど捨ててあるし、幼少期の記憶も性格形成に必要なものはデリート済みよ。アランの記憶も大分消しちゃったみたいね。どうやら完全に貴方の為に作った存在みたい。心配しなくても貴方との記憶は全部持つてるわ、蜜月の日々もね？」

くすくすと笑いながら言うてる。このアマ、その羽むしってやるうかつ！

「あらあら、怖い怖い。でもなんか不思議ねー、こういう視点は初めてだから。それに空を飛べるって不思議な感じ」

羽をばたばたを動かしながら宙を回るシャリー、いや、彼女も言っていたようにゲームの時のキャラ名で呼ぶならフェリだろうか。個人的にはシャリーを押ししたい所だが。

「そうね、フェリ、で呼んで欲しいかな。きっとあの世界の私は死んじゃったし、それに全くの同一人物じゃないしね」

ひらりと目の前に舞い降りてきて少し悩んだ後そう伝えてくる。そうか、死んでしまったか、結局、いや予想通りといえば予想通りなのだけれども。

「そんな顔しないで、だいたい貴方も悪いのよ、勝手に私を置いて死んでしまうのだから」

「お前が勝手に先走ったんだろうが」

「そうね、うん、ごめんなさい。体を使ってお詫びできないのが残念だわ」

そう言い、自分の胸を持ち上げたり、襟元を開いて自分の体を確認している。さすがにこの体は入らないわねえ。と呟いている。シリアスモードが続かないのかこの馬鹿は……。はああ……。と盛大にため息を付く。

「ふふ、でもやっぱり空を飛べるのっていいわあ、癖になりそうね」

「召喚師スキルのエアドラゴンで良く飛んだら」

「それとこれとは別よ、なにより小さいサイズってのがいいわね。あーでも貴方のもう啞えられないわねえ」

うーん、とその小さな指を顎に当てて頭をかしげる。しかし目尻は下がり完全に笑いを堪えている。

「そのネタはもういい。本当にむしってやろうかその羽」

「くすくす、冗談よ。体全身でサービスしてあげるわ」

「よし、むしってやるクソ野郎」

その後酒場の主人が何事かと部屋に入ってきて、粉々に壊れているベットを見て悲鳴を上げたのはまた別の話だ。

以前のゲームシステムでは世界の発展は行われていなかった。それはAIシステムに制限をかけることで可能としていたシステムだ。それは何故か？ 答えは簡単である、恐れたからだ。AIシステムである彼等が、AIであるその人工物が、生み出した親である我々の技術を上回る事を恐れたからだ。しかしこの切り離され独立の世界となったヤールウエは違う。システムによる抑制を失った世界となり何処までも進み動いていく。たった二人だけだが、そのイレギュラーを抱えた状態で。

フェアリーの体に入ったシャリーは考える。私も彼も人格崩壊、いや精神異常を引き起こしていない。ゲームの中に入ってしまったことによる恐怖感は、二度とリアルに戻れない恐怖感は並大抵のものではない。しかし、彼はそもそも世界に価値を見出していないかった

し、私は弟が死に絶望の淵に居た。記憶していないがおそらくデーター転送の際、そういつた点で不具合が置きそうな箇所を本体、リアル私がデリートしたのかもしれないが、おそらくそうではないかと予想する。

ただ、ただしかし、彼も、そして私も、お互いが居たからここに存在し、確立できているのだと、そう思う事は悪いことではないだろう。目の前にいる彼を見る。店の主人に怒鳴られていながら何処吹く風と聞き流し、遂には文句あんのか？ ああ？ と主人の襟首を持ち上げた所で、そろそろ止めないと、と考え思考するのをやめることにした。

まったくもっていつまでも子供の様な人だと、自分の男を見る目の無さに少しだけ絶望する。でも、最後の彼の顔を思い出し、私を見る目もそう悪いものではないかもしれないとも思った。

D i v e 6

ヤーウエの世界にはA Iが存在している。いや、もはやそれは人と相違無い人が存在している。彼等は食事をし、子を成し、そして繁栄していく。悲しい時には泣き、辛い時には嘆き、理不尽な要求に怒り、そしてその心に従い愛し合う。

ただの0と1の羅列だろうか？ いや、それは違う。彼等は、彼女達は生物学上で人でなかったとしても、紛れも無く人に違いなかった。

この世界では、一つの目標とされているゲームシナリオがあった。MMOではお互い協力し合い、打倒する為の敵対勢力を必要とする。それがプレイヤー同士だったりする場合もあるのだが、このヤーウエではレリウーリアという魔界の総大将が目標であった。

そう、魔界。この世界のモンスター、魔獣が生まれる土地、そして生まれる世界。この合衆国と同程度の広さを持つ世界の左三分の一を占めている土地であり、そこではまるで霧から産まれるように、土から産まれるように、無限にモンスターたる魔獣が産出されているシステムがある。

なんでこんなシステムを残したのか？ それは、シャリーはA I設計者。世界の構築から世界のシステム変更なんて技術、小指の垢ほども無かったのだから。

D i v e 6
世界の仕組み

「つまり、この世界は結局の所、AIシステム、いやここに住む人々の発展は有るが、魔界は依然として存在し、危機に晒されているというわけだな？」

シャリーもといフェリに窘められ、しぶしぶながらベットの賠償金を払ったりヨウことエイスは、どかりと備え付けられた椅子に座り、現状の認識を行った。

現在、自分の記憶が転送されたこのキャラクターは、ゲーム開始前に作りテスターとして動かしたヒューマン族のエイスで間違いない。職業は呪術師、そして格闘家と召喚師のマスターでもある。先ほどベットを叩き割ったことでも予想できた。少なくともリアルの貧弱な体ではあんな事は出来なかった。貧弱な体ながら口が悪いの

は直らなかつたのだが。

それとフェアリーのフェリの事だが、サポートシステムの名前の通り、正直何も出来ることは無い。彼女は課金初心者パツクに封入されていただけの存在であり、Lv20までの育成を手伝ってくれるだけの存在なのだ。戦い方から武器の説明、この世界の仕組み等々。そのスタート地点のNPCからも聞ける内容ではあるのだが、初心者パツクの特典的存在でもあった。

彼女が言うには、データ転送の際、空き容量で詰め込める媒体はこれしかなかったそうだ。確かにフェアリーなら食う容量も少ないが、抵抗は無かつたのだろうかとも思う。実際データを打ち込むほうは打ち込むだけだからさほど感じないかもしれないわね、とは彼女の談だ。言われてみれば確かにそうかも知れないな、とも思う。

とりあえず、3年ぶりでもあるのでスキルの確認と、街の状況確認が必要だろうと考え外に出ることにした。宿を出る際、俺の顔を見た瞬間ビクツと体を強張らせた主人は見なかつたことにしておこう。

「あんまり脅かしたら駄目よエイス。貴方の体は今この世界ではまさに最強無敵なんだから。NPCの最高レベルが150なの知ってるでしょ？ 魔界との境界にある前線基地の総隊長で唯一200なんだから。マスタークラスの二つ持ちで、さらに貴方呪術師280まで上げてたでしょ？」

正直自嘲しないとんでもない事になるわよ。この世界ではNPCでも私の子供達、きちんと自我を持ち、人と相違無い、いえ、人なんですから。自信満々にそう告げた彼女は無くなってしまった胸を張り、俺の肩の上で威張っていた。正直如何でも良い話なので無視して先に進む、わわ、落ちる！ と耳元で叫んでいるが知った事

ではない。

「正直他人が如何とか興味が無いな。ま、目立つのは困るからある程度自嘲はしよう」

肩の上では落ちると認識したのか、ついには頭の上にしがみ付いたフェリ。オールバックに整えられていた髪が落ちまいとしがみ付く彼女の手のせいでぐちゃぐちゃになっていく。むんず、と頭の上にいる彼女を掴み、そのままローブのポケットに突っ込んだ。なにか叫んでいたが気のせいだろう。

「とりあえずはフィールドかね」

そう考えて移動用の召喚獣を出そうとする。と、先ほど押し込んだポケットからフェリが顔を出して引き止めた。

「ちょっとちょっと！ 何出そうとしてるの!?!」

「あん？ 移動用ならLv200の【飛燕龍】かLv220の【エアドラゴン】あたりだろ？」

前者が赤い鱗に覆われた竜で長い尻尾と鋭い牙、凶悪な顔が特徴的な空を舞う竜。後者が翠の鱗、穏やかな表情に、銀色の髭を生やした竜。完全移動用なのが後者であり、召喚獣の体力がなくなるまで術者にダメージを与えないなどといった特殊能力を持っていたりするのだが、攻撃能力が無いのが特徴だ。それと変わって前者は攻撃能力もあるのだが。どちらにせよ徒歩で行くのは面倒この上ないので、早速詠唱に入ろうとした所でフェリから再度ストップの指示が出た。

「この馬鹿！ こんな所でそんな物だしたら目立つこと間違い無しでしょうよ！ 少しは考えなさい！」

「めんどくせえな」

ちっ、と舌打ちし、仕方が無いので別の者を呼び出すことにする。

「こい、【白虎】」

召喚師Lv70スキルの【白虎】、その名の通り、白い毛に覆われた虎である。人が一人乗れる程度の大きさであり、地上を走る移動用召喚獣だ。召喚者である彼から少しだけ離れた場所に魔方阵が浮き上がり、そこから白い毛並みに覆われた虎が出現する。一鳴きした後こちらに近づき、アイスに向かって頭を垂れた。

「それでもこの街では十分なくらい強力なんだけど……、まあいいわ……」

はぁ、とため息を付いてローブのポケットから這い出て頭を垂れている【白虎】の背に乗るフェリ。流石に大通りではなかったが突然出現した【白虎】にざわざわと騒ぎ出す人々。そいつらをギロリと睨み上げた後、背の上に乗る、フィールドに向かって駆け出した。

前もそうだったが、他人のやることにそこまで関心を持つのがいまいち理解できない。恋人や両親や、そう、近しい肉親ならまだしも、完全に他人ではないか。助けて欲しい時に助けてくれなかった他人が、これ以上俺に干渉してくるな、と思うが、同時にそれは違うと窘める声も聞こえる。そう、分かつてはいる、分かつてはいるのだ。

ちっ、と景色が流れるように進むその召喚獣の上で、何度目かわからない舌打ちをするのだった。

「大体の所は問題ない、か」

コキリ、と首を捻り、パンパンと手を払う。目の前には死屍累々、数え切れないほどのモンスターの死体が散乱しており、そして霧と

なって消えていく。そこにはドロップ品であるアイテムが山のように散りばめられた一種の宝の山となっていた。

「モンスターが消える仕組みは変わらずか。アイテムも同じ、と。インベントリ内部で重なってくれるシステムはありがたいよな」

そう言いながら大量に落ちているドロップ品を腰に付けているインベントリボックス、通称不思議鞆に突っ込んでいく。この鞆に入れたアイテムはシステムコンソールを開く事で再度見ることが出来る。また、その空き容量も、だ。

アイテム一覧を開くとブラックベアの胸肉×2、グリズリーの肉×8、ビックフッドの爪×2、ウルフウッドの牙×9等と表記されている。先ほど広範囲殲滅呪文の餌食になったモンスターと、格闘家スキルの試し打ちにされたモンスターの慣れの果てだ。敵が弱すぎたため瞬殺所の騒ぎではなかったのだが、所詮試し打ちに過ぎない。勘を取り戻すほどではないが、使い勝手を戻すには丁度良かった。

余談だが、所持金は取得経験値100倍の時に一気に稼いだものがそのまま残っている。その額およそ4億リブ。この世界ではリブがお金の単位となっている。金銭価値的にはリアルとほぼ同じだ、今後成長するので変動があるかもしれないが。

この大量に有る金で家でも買って、適当に過ごすのも一つの手だな。と、今後の予定の一つとして考えているエイスでもあった。

「ああ、森が焼け野原に……、今度はゲームマスターによるシステム修正は入らないの……」

さめざめと焼け野原になった森を見ながら泣いているフェリ。最初はノリノリだったくせにずいぶん話だ。散々燃やした後、こ

れ毎回メンテナンスで修復してたの大変だったんだよなあ、とポツリと呟いた俺の言葉にビクリと反応した。そしてその後はあの態度と言っわけだ。天才じゃなかったのか？ いや、まあ世界に関しての設定は彼女は関わっていなかったから、そこも関係しているのかもしれないが。

とにもかくにも、3年前の感覚はなんとなくだが取り戻した。最早ここには用は無い、街に戻って宿に行くか、それとも折角だから家でも買おうかと考えている所で遠めに馬に乗った数名の何者かが見えた。あの旗はたしか、ヴァルフニア騎士団、か？ 日の光に当たり光るその銀色の鎧と、赤色の十字旗、城塞都市の守り神、ヴァルフニア騎士団に間違いない。おそらくこの焼け野原状態の森を調べにやって来たのだろう。

「めんどうだな、ここから遠距離魔法で潰すか？」

「駄目に決まってるでしょ！ 私の子達よ！」

「可愛い子には旅をさせよと言っじゃないか」

「冥府に旅立つちゃうわよ！」

羽をばたばたと忙しなくはためかせながら抗議してくるフェリ。しかたがないか、と待機させていた【白虎】に乗り、彼等とは反対方向に駆け出した。

「これは……」

「副長、誰が一体こんな事を」

エイスが【白虎】に乗ってその場所を走り去った後、馬に乗った

数名の騎士がその場にたどり着いていた。そして目の前の光景に絶句し、硬直している。

目の前には大量のドロップ品、おそらくかなりの数のモンスターを倒したのだと思われる。問題はそれだけではない、周囲の森が消し炭にされている事だ。木々は灰となり、地面は抉れ、いまだプスプスと火種が残っている。

「こんな真似おそらく騎士団長でも不可能だ。前線基地に居る世界最強の呪術師と名高いシヤリア様なら分からないでもないが、あのお方がこちらへ戻ったという話は聞いていない」

焼け焦げた森と散乱するドロップ品を眉を顰めて睨みつける。これまでの広範囲攻撃魔法は見たことが無い。となると想像できるのは最強と名高いシヤリア「アルタシア様。おそらく彼女でも到底出来そうに無い結果であるのだが、世界最強と名高い彼女を引き合いに出した彼に非は無いだろう。なぜなら彼は知らないのだから。」

「まさか、強力なモンスターが現れたのでは！」

「いや、それはありえん。それであればここまでモンスターを一方的に虐殺するとは考えにくい」

意志の疎通が出来ない下級モンスターであればわからないが、強敵とされる上級モンスターがその様な愚考を起こすとは思えない。そしてこの仕業は下級モンスターに出来ることではない。

「どちらにせよ王に報告が必要だ。検問の強化と守備隊に連絡を。もしこれを行った者が我等の敵となる場合、グランヴァス、ジルコニル、ボルドーザに援軍を求める必要がある」

「わ、わかりました」

ヴァルフニア騎士団副長の深刻な顔に顔を引き攣らせるもう一人の騎士。持った槍を所在無さげに周りを威嚇するのに使い、周囲を警戒している。

「とりあえず一旦戻るぞ、周辺を探索している者にも声をかける。最終判断は騎士団長に仰ぐ必要がある」

「は、はっ！ 了解いたしました！」

警戒中のその騎士に声をかけ、その場を後にする。これを行った者が敵でないことを祈りながら。

D i v e 7

ヤーウエにはパッシブスキルというスキルが存在する。それは常時発動しているスキルであり、特別使用する必要も無く、影響、効果を与えてくれる物である。

彼がマスターとなった二つの職業。格闘家モンクと召喚師。その二つにも多くのパッシブスキルが存在している。むしろそのパッシブスキルが職業の特徴を出してるともいえる。このゲームにはキャラクタ自身レベルは無く、職業のレベルが全てとなっている。正確には職業レベルを上げて得られるスキルが、であろうが。

話を戻そう。格闘家モンクのパッシブスキルとして有名なのはHP増加、回避率増加、武器未所持による攻撃力増加、オート回避等有る。そして召喚師はMP増加、召喚キャストタイム減少、召喚獣強化等が有った。

マスタークラスを得るということはパッシブスキルも引継ぎできるといふ事で、単純な話、彼は300+300+280、つまりLv880と言っても過言ではなかった。如何考えてもバランスプレイヤーも良いところだろう。なにせ、見た目完全な呪術師でありながら、Lv60のグリズリーを素手でタコ殴りにしていたのだから。

冒険者、そもそもその仕組みが理解できない

「ギルドねえ……、やはり加入したほうが良い、か」

正直な所ギルドは一度加入している。テスターの時にだが。しかしこのギルドシステム実は配布されるギルドカードに番号が振られていたのだ。俺がたしかNo.3だったはず。しかし、ゲームが開始される時、一桁ナンバーを抽選形式、もしくはイベントの景品にしようとの事で俺達テスターのギルド登録はデリートされたのだ。つまり今の俺はギルドに所属していないフリーランス状態。金もあるので全く問題は無いのだが、ギルドは身分証明書の代わりともなるため、持っておいたほうが良い。特にこの世界で生きていく上では。

しかたがないか、と重い腰を上げギルド登録に向かうことにする。ゲームではプレイヤーはLv20になりこの大都市を訪れて一番最初に行う事でもある。たしか登録するだけのクエストもあり、そこで初級ポーションを数個貰えた筈だ。俺が使ったところで数ドット程度しかHPは回復しないのだろうが。

外に出て暖かい日差しに当たり、自然と出てくる欠伸をかみ殺す。さて、行きますかね、とギルドに向かつて歩き始めた。ちなみにフエリは羽織っているローブのフードの中で寝ている。良いご身分な事だ。

そう言えば忘れていたが、今俺が装備しているこのローブ、カルフマインのローブと言い敵対値を下げてくれる効果を持っている。正直そんな効果は如何でも良いのだが、踝まである丈の長さ、そのシンプルなデザインが気に入っておりテスターの時もずっと付けていた物だ。現実と見間違うほどのこの世界ではそういつた見た目に拘って装備をそろえる人も沢山居た、俺としては共感できるのだが、日がな一日中ビキニで過ごしている人も居たのでそれはどうなのだろう、と思ったこともあった。

そんな事を考えている間にギルドに着いた。その建物はかなりの大きさを誇っており、高さは2階建てなのだが、その広さが凄い。チームの編成からクエスト掲示板、そして裏庭ではスキルの試し打ちが出来る案山子のベンジヤミン君が居たはずだ。カランという鐘の音を鳴らしながら木製の扉を開く、同時に喧騒が聞こえてくる。現実の人と変わらないAIシステムを有効活用し、同じプレイヤー同士だけではなくAIともPTが組むことが出来たこの場所は、今はすべてAI、いやヤーウエの人々だけが存在している。

ヒューマンの都市なだけあってヒューマン族が多いが、ちらほらとエルフやドラゴニック、そしてワーキャット、ワーウルフも居るようだ。そんな彼等を横目に受付に向かう。まずは登録しない事には始まらない、栗色の髪をショートカットにし、少しだけ毛先がウエーブがかった彼女。ギルドの受付の女性であるリアーフレンズ、一日に何百人とプレイヤーの相手をし、特には口説かれたこともあるだろう彼女に話しかける事にした。

「ギルド登録をしたいんだが、いいか？」

「はい、有難う御座います。って、あれ？ どこかでお会いしたことありましたか？」

3年前のテストの記憶は全てリセットされているはずだったが、目を細め、こちらを見てくる彼女。リセットが上手く働いていないのか、それとも。

「人の記憶と一緒に、完全に消すことなんて出来ないのよ。ざまあないわねあのバカ共」

フードからひよこっ顔を出して耳元で喋るフェリ、なるほど、そういえば記憶消去の話の時最後まで反対していたのだったな。人の記憶を勝手に弄るなんて、と。脳を弄る為のMMOを広めようとしているのにずいぶんとふざけた話だ、といろいろ言われた彼女の落ち込みようは酷かった。それを言った相手を殴り飛ばした俺もずいぶんとえらい目にあっただが。喧嘩が強くも無いのに殴りかかるのはやめるべきだとは思っただが、体が勝手に動くのだから仕方が無い。

しかし、覚えていると言っても、所詮うつすらと、霞みがあった霧の中に居るようにぼんやりと、なんとなく、程度に過ぎないだろう。生憎と俺はあったことは無い、と返し、登録を進めてもらうことにした。ギルドの説明は必要ですか？ と問われたがどうせ変わっていないだろうし、断った。フェリが念のために聞いておいたほうが言いと言うので、フェリをその場において、こいつに話しておいてくれとその場を離れた。

フェリを見た彼女の反応は目に見えるほど明らかに動揺し、フェ

アリー族！ そんな！ 存在していたなんて！ と騒いでいる。たしかにプレイヤーが居なくなればフェアリー族が居なくなるのも間違いないのだが、それにしたって驚きすぎだろう。そう考えていた所で俺は決定的に勘違いしていたことに気が付いた。俺はずっとMMOの世界に入り込んだと思っていただけだが、この世界はもしかして、3年間MMOとして世界に広がったゲームではあるが、そのバックアップとしてあったシステムなのだから、MMOが始まる前の、そうヤーウエの人々しか居なかった状態、つまりMMOが始まる寸前の世界に転送されたのではないのか、と。

「あれ、言っただけじゃなかったっけ？」

とはフェリの談。とりあえずその小さな頭にデコピンをかました後、クエスト掲示板を見に行く事にした。物凄い騙された感があるあの野郎。よくよく考えてみれば、プレイヤーが3年間居た世界に飛んだのであれば、たかがLv70の【白虎】程度で騒ぐのはおかしい、あの世界ではその程度の人間は腐るほど居た。さらに言うならマスター持ちも多かったのだ、【エアドラゴン】や【飛燕龍】なんて見慣れたものになっていたはずだ。何で気が付かなかったのやら、というかそれ所では無かったという話でも有るのだが、なんにせよもう一発くらいフェリにデコピンしてやるうと決意した。

ギルドについてお話ししよう。

ギルドシステムは皆さん良くご存知ゲームシステムによくある冒険者である。街に存在しているギルドに行き、そこに張られている手配書、護衛依頼、配達依頼、小間使いから手伝い、日曜大工等々、要するに便利屋、雑用係といったところだ。モンスターのドロップ品を求めたりする物もある。自由度が高すぎたこの世界では人々から受けれるクエストも沢山あったが、このギルドで請けられる仕事もそれこそ星の数ほどあった。

ギルドのランクはE〜A、そしてSランクとなっており、クエストクリアによって貰えるギルドポイントが一定以上に達するとクラスアップとなる。システムコンソールに後何ポイントでクラスアップが表示され、クラスアップすると自動的に所持しているギルドカードの色が変わる。Eはホワイト、Dはグリーン、Cはアイアン、Bはブロンズ、Aはシルバー、Sはゴールドといった形だ。ランクによって受けられるクエストは変動し、下のクエストを受ければ報酬は同じだが溜まるポイントは減る、場合によっては無くなる。上のクエストは一つ上まで受けることが出来、同格、もしくは一つ上のクエストは表記どおりのポイントを貰うことが出来る。まあ、その辺のイメージはゲームに準じているので追々話そう。

「終わったのか？」

リーアから説明を受けていたフェリに声をかける。いつの間にか仲良くなっていたようで完全なガールズトークとなっている。俺に声をかけられて初めて気が付いたのか、驚いた顔でこちらに振り返り、そして話に関しては一通り聞いたよ、と返してくる。

「そうか、じゃあ悪いがツイでクエスト報告をさせてもらおうか」
カウンターの前に座っているフェリをぼい、とフードの中に放り込み、あああつ！ と悲鳴が聞こえたような気がするがそれはおいといて、引き攣った笑顔でこちらを見るリーアに深緑亭の依頼、グリズリーの肉×5、鍛冶屋ガルバンからの依頼、ビックフードの爪×1・ウルフウツドの牙5個を渡した。

「まさか、既にお持ちに……、いえ、それよりビックフードの爪なんてそんな簡単に手にはいる物では」

「さっさと報酬を寄越せ、別にあんたが驚こうが驚かなろうが結

果は変わらんだろう」

ギルドカードを彼女に放り投げ、先を促す。フードの中で貴方の口の悪さはもう一生直らないのでしょーうね、と嘆き声が聞こえるが無視する。もはやこれが俺のしゃべり方なのだから仕方が無い。慌てて品の確認を行った後、直ぐに報酬を渡してくれた。深緑亭は5万リブ、鍛冶屋ガルバンは20万リブだ。そいつをインベントリに突っ込み、その場を後にする。手には数枚の手配書、別に金に困っている訳ではないが、ギルドランクは高ければ高いほど優遇される、目立つのは面倒なので精々CランクかBランク程度になったら後は放置する予定だ。

ギィ、と入ってきたときと同様に木製の扉を開き外に出て手配書に記されていたモンスターが居る方向に向かうことにした。ギルドに居た時から粘つくような視線を感じていたのを無視したまま。

ギルドを出た後暫く歩き、そして路地裏に入っていく、暗殺者の職は取らなかつたので気配察知や闇隠れなどのスキルは残念ながら持っていない。しかし、明らかにこちらをつけている男が5人、ギルド所属者なのだろうが、如何考えてもろくな事を考えていなそうな顔付きだ。顔付きは正直人の事は言えないのだが。人氣が無くなつていく路地裏、その行き止まりでため息を付き、振り返る。そして通路の角に向かって声をかけた。

「それで、何の用かな？」

同時に影から数人の男たちが出てくる、その手には既に武器が握られており、ニヤニヤと軽薄な笑みを浮かべている。

「へっへ、それなりに腕が立つようだなにいちゃん。ま、しかし所詮はいい所のぼっちゃんか、偶然爪を手に入れたって所だろう？」

呪術師の様だがビックフットは魔術じゃ倒せねえ、常識だぜ？」

げらげらと笑いながら話して来る男。まあ、たしかにビックフットは蹴り殺したから魔術は使っていない。とはいえ俺のレベルならビックフットの魔術抵抗性の高い毛ごと蒸し焼きに出来るのだが。

「とりあえず有り金全部置いていきな。さっきの報酬が懐に入っている事は知ってたんだぜ？」

ふむ、と考える、そして後ろのフェリと話をする。このパターンはありえる話なのか？と。

「たぶん、補正や抑制がなくなってしまった弊害かもしれない。日々修正する修正プログラムからも切り離されちゃったし、有る意味本当に人間らしくなっちゃった可能性は有るわ」

なるほどねえ、と頷く。さらに言うなら蘇生、修復する機能も失われている、死は死、蘇生魔法とかならいけるかもしれないが、システムによる自動蘇生は無いと考えたほうが良い、か。

「悪いがこいつらならかまわんよなフェリ」

「私は、嫌よ」

「はあ、くだらんな。殺す時に殺す、そうしないと死ぬのは自分だ」

「貴方のその考えだけは好きになれないわ。貴方の過去の話は聞けばそういつ気持ちになるのも分かるけど」

「ならば、目を瞑っておけ」

そう言ってローブから腕を出す。ゆらりと右腕を前に、左腕を下に、独特の構えを取る。格闘家Lv180スキル【獅子咆哮】まるで陽炎のようにエイスの周りがぼやけていく。

「あ、あ？ なめやがってやる気か？ おい、お前等やつちまえ、殺しても半額はドロップすんだろっよ！」

そう叫び声を上げた男、そしてその数秒後顔を細胞レベルでバラされた。

「なっ！」

「え？」

「な、なにが！」

既に男たちの視界にエイスは居ない。【獅子咆哮】の一撃、中距離攻撃の一つであるその技は5mまでの距離に存在する敵に衝撃派を与える技だ。本来であれば昏倒や、コンボに繋げる初撃に使うのだが、そのレベル差のあまり、食らった相手は頭を爆散させたのだ。

「ふっ」

ギヤリ、と地面を踏みしめる。格闘家の真髄はここから始まる。素手による攻撃は他職に比べ圧倒的にダメージが低い。だがしかし、格闘家はスキルの連結使用が可能であった。つまりコンボである。その最大数の連続コンボは24連撃を誇る、手数でこの職は火力を出していたのだ。

二撃目が入る、既に最初のターゲットは死亡を確認。隣に居たターゲットに自動再設定され、コンボの続きが始まる。システムの自動補正により体が動かされる。【刃斬】、突き刺さる手刀、そして【残光】振り上げられる腕、上半身が半分に切り裂かれ、血を撒き散らすそのターゲットが倒れる前に次のターゲットの前に移動する。

ようやく状況が掴めたのだろう、武器を構えて攻撃を加えようとするが、格闘家モンクのパッシブスキル、体裁きが発動する。ステータス値を基準とし、一定以上の差が発生している場合100%で攻撃を回避するスキル。するりと振り下ろされた剣を避け、【流撃】。ドン、と手の平を心臓に当てる。衝撃が突き抜け対象の背中肉がはじけるのを確認する。そのまま横の一人を蹴り上げる【翔脚】、バン、という音を鳴らし、本来であれば宙に浮かせる技だが、耐え切れなかったその男の体が弾ける。

そこでようやくコンボは終了した。格闘家モンクのスキルの中でもかなり少ない方のコンボなのだが、既にそこには腰を抜かして座り込む男が一人だけ残っており、他はただの肉と化していた。

「まったく、馬鹿共が。貴様等のケツを拭う為に居るわけではないのだぞ」

部下より提出された書類を未処理中のライトビンに放り込み、悪態を付く。その書類はシャリー・リファリオットの殺害と残務処理に関する報告書だ。

「転送作業は無事完了いたしました。まあ目に見える結果がないと納得しませんか」

目の前に座る男が悪態を付いていた男性に答える。軍服を着ており、胸に着けているバッジがその階級を示しており、少なくともこの様な場所に居てよい存在ではないことは明白である。

「アラン・リファリオットは唯の人質でよかったのだ。それをAIシステムの研究促進の為に暴走した馬鹿共のせいで結局シャリーを失うことになった」

「サルベージは出来ませんでしたか？」

「ああ、むしろそれを予測して頭を打ち抜いたんだろうな。AIシステムは完全に凍結してしまった」

ふう、とため息を付き、天井を見上げる。シャリー・リファリオット、AIシステムの設計者であり第一人者であり、まさに天才の名を欲しいままにしていた女性。だがしかし彼女はもういない、とあるデータを持ち出して、殺害命令が下されて、そして死んだ、頭を打ち抜いて。

AIシステムはとても画期的なシステムだ、それに注目したのは

軍部。人と変わらない人、記憶を転写可能なシステム。それはとても魅力的な技術だったのだ。優秀なパイロット、優秀な兵士、優秀なエンジニア、優秀な科学者、それがボタン一つで大量生産できる可能性を含んでいたのだから。

彼女はMMOを利用した脳開発の研究結果を強奪した。それはこの国における信用問題を揺るがす危険性を孕んでおり、そしてその事を知った彼女そのものがこの国にとって危険な存在となってしまう。さらに不運なことに、もはや彼女の存在はそれほど重要ではないと考えるものが居たことだ。ボタン一つでコピーできるのであれば危険性のあるオリジナルはもう不要なのではないか、と。そう考えて暴走した一部の人間があの結果を引き起こした、まさか自分の全データを消去し、あげくに脳を打ち抜いて死ぬような結果になるなどとは予想していなかったのだろう。

「転送作業は無事終わったのだったな」

「ええ、生憎と氷山リヨウのキャラクターは使用されてしまったので、他の3キャラクターにインストール済みです。内部データ数値を見る限りではリヨウのAvatarであるエイスが頭一つ抜き出ていますが、他の3名もマスターで使用されていたキャラクターです。で、与えられた職に関してはマスタークラスを所持しています。1対1では難しいでしょうが、3人でかかれれば問題無いでしょう。生憎とバックアップにあったデータは削除済みでしたが、VRシステムのヘッドギアにデータが残っていましたので、そこから監視衛星経由で転送しました。圧縮データで飛ばしましたので解凍されるまで時間がかかるかと思いますが……」

立体映像で表示される各Avatar。シャリー、リファリオットが使用していたキャラクター、フェリもそこに映っている。呪術師マスター、そして神聖術士マスターのキャラクターだ。

「インストールしたデータは？」

「プロトタイプではありませんが、AIシステムを使用して開発しているソルジャーシステムです。仮想空間における人格崩壊は起こりえないでしょう」

ポン、と軽快な音がしてシステムのログが流れる。ソルジャーシステム、熟練兵士の脳内データをスキャンし、そして人間的な要素をデリートし、ただ殺戮する為だけのシステムプログラム。当然最低限の善悪の判断くらいは有るが、命令を最優先としたシステムだ。善悪の判断と言っても、それはあくまでこの国にとっての善悪という前提が置かれているのだが。

「しかし、データと化した相手までも欲しがるとはな。そこまで魅力的なシステムという事か」

「金をかけた以上回収は必須です。まあ、それと爆弾を宇宙空間とはいえ放置はしたくないのでは？」

ふん、と鼻で笑う。結局はそこだ、どいつもこいつも自分で火種を撒いておきながらその火種が自分に降りかかるのを嫌う。そしてその火種を処理するのはいつも何も知らぬ国民か、そして全てを知らされた奴隷か、だ。

正義等無い、それは立位置によって変わるものだから

およそ10秒足らずで4人の男を殺したエイズ。HPバーを一気に削りきり、死を与える。道端に横たわる彼等は黒く色が反転しており、それぞれの体の上に数字が浮かび上がっている。10、9、8と少しずつ減っていくカウンター。これは蘇生可能なまでの時間を表している。この時間内までに蘇生スキルか蘇生アイテムを使えば彼等はデスペナルティー無しで蘇生できるのだが、その時間を過ぎるとデスペナルティーとして3時間のステータス半減、そしてアイテムのランダムドロップとリブの半額ドロップが課せられる。それがMMOとして世界に普及されていた時の仕組み。だが、この世界ではその補正プログラムは働いていない。カウントが過ぎ去った彼等はおそらく消滅する、アイテムドロップはあるかもしれないが、街の保存拠点での復活は無い。ここはゲームでありながら、ゲームでない世界なのだから。

ちなみに余談だが、MMOの時の世界はプレイヤーキラーやNPCキラーを行うとペナルティが課せられる。決闘、もしくは団体戦などの双方合意の上での戦いなら別として、一方的な攻撃を加えると名前表記がまず黄色文字で表記される。そして相手を殺害すると

赤文字で表記されるのだ。

殺害した相手のリブ入手やレア装備入手の為、そういった手段に出る人も稀に居た。しかし殺害した場合、1人に付き24時間の攻撃力強制的0化、そして受けるダメージが2倍になるという厳しいペナルティが課せられた。また、MMOでは安全地帯とされていた街にも入ることが出来ず、そして宿も取れない、さらにその状態で死ぬと全アイテムドロップという非常に厳しい罰となっていたのだ。そのためMMOの世界ではそういう事を行う人は殆ど居なかったのだが。

彼はそのシステムが死んでいることを知っていた。なぜならばそのシステムを作ったのは彼であり、さらに言うなら店の主人でそれを試していたからだ。襟首を掴み持ち上げた時点で本来ならイエローネームになるはず、だがそれは何も変わらなかった。さらに安全地帯とされる街の設定もMMOが始まる時に変更された点だ、当然の話ではあるが、十分な下地を調べ確認した上で彼は殺害に至ったのだ。単純に気に入らなかった、という可能性も否定できない所では有るが。

「さて、残るはお前だけだが？」

腰が抜けてしまったのか、ずるずると必死で逃げる最後の男。黒く反転して横たわる仲間達を横目で見ながら声にならない悲鳴を上げて必死に大通りに戻ろうとしている。だが、そう簡単に逃がすつもりもないし、逃げれるわけも無い。なにより彼には聞かなければ成らないことがある、その為にはまだここに残って貰わなければならない。

逃げようとするその男の背中に右足を振り下ろし強制的にその場に縫い付ける。つぶれたカエルの様な声を上げて地面に押し付けら

れた男は、助けて、と壊れたスピーカーのように繰り返していた。

「聞きたい事がある。俺を付けたのは独断か？ それとも誰かの指示か？」

しゃべらなければまず右腕から行くか？ と背の上に乗せていた足をどけ、右腕の上に振り下ろす。豪快な音を鳴らして腕があつたほんの数センチ横に足が突き刺さり、レンガ造りのその道を砕き、破片が舞う。

「ま、ま、まっしてくれ。話す、話すから、たのむ見逃してくれ」

その後直ぐにぺらぺらと喋ってくれた男、その情報を纏めるに、指示をしたのはドラゴニック族の男だそうだ。いまいち要領を得なかつたが、確認作業だ、と聞いているとの事。なんの確認作業なのか良く分からない。その男も同様だったようで、同じように聞き返した所、他の二人が目覚めるのに時間がかかる、それまでに調べられる事は調べておく為だ、と言っていたと。さらに解らない状況になつてしまったのだがどうにもこうにもこれ以上の情報は持っていない様子。

俺の実力を測るため、と考えるのが一番なのだろうが、それにしてもやり方が荒っぽすぎる。その筋の人間には手を出した覚えはないし、今のところ大して目立ったことはしていない。あえて言うなら【白虎】くらいではあるのだが……。

俺への襲撃報酬は1000万リブ、かなりの大金であり、馬鹿共が食いつくには良い餌だったのは確かだ。しかしドラゴニック族か、しかもそこまでの大金を用意できるとなると限られてくるのだが。単純に口からの出任せという可能性は有る、だが前金で100万リブは貰つてるとの事。少なくとも100万をぼんと出せる人間に絞

られる。

この世界に来てたったの1週間で面倒な事になったものだと、空を仰いだ。

ローブのフードに蹲っているフェリに意見を聞こうとしたが、どうにもいじけてしまっている様だ。いや、それともまた違う様だがどちらにせよ分からない事は分からない、相手の顔もフードで隠れていたとの事だしドラゴニック族、それだけしか分かっていない。受動的になるが、しかたがない。相手の出方を待ちながら調べるしかないか、と考える。

例え相手がどれほど強くても、自分より強いということは考えにくい。この世界の最高レベルは200、そこでモンスターと大量に戦いレベルがあがったとしても、300で止まる。転職が出来るのはプレイヤーキャラクターだけであり、課金アイテムを必要とするのだ。そのシステムはMMOサービスが始まった時は課金アイテムとして普及したのであるいはその仕組みが生きていれば課金アイテムを取り扱っていたNPCから購入も可能だったかも知れないが、テスターの時は直接個人に配給されたのだ。となるとこの世界で手に入れる方法は無い。

つまりどんなに頑張った所で300が限界、それが数百人も来ると言うのなら話は別だが、そんな数百人も高レベルを集めるのは不可能だ。レベル上げだって死ぬ可能性がある。MMOと違って保存地点で復活は無いのだから。そういう観点からその方面での心配はしていない。する必要は無いと考えていた。

「ああ、そういえば、忘れていたよ」

思考の海に入り込んでいた俺は足元に蹲る男を再度認識した。す

すっかり忘れていたその男の顔を吹き飛ばす。しっかりと殺した後、蘇生時間が終わりそこにはドロップアイテムと気持ちばかりのリブが残った路地裏を後にした。

「最低よ……」

宿屋に戻ったフェリの最初の一言。別に最後の人まで殺す必要はなかったんじゃないかと非難轟々であったが、知った事ではない。あの男が大人しく引き下がる保障が何処にある？ 復讐しに來ないといえる根拠はどこに有る？ さらに言うならあの男が通報し、憲兵を呼んだら死者が増える。むしろそういう意味では最小限の犠牲で済んだのではないかと。

「そういう問題じゃないのよ……。でも、いいえ、ごめんなさい。私も結局殺した側の人間、貴方を責める資格は無かったわ」

そうぽつりと呟き、壁際にかけていたローブのフードにまた収まった。殺した、か、おそらく弟の事を言っているのだろうか、完全に記憶を消去したのではなかったのだろうか？ それともそういうイメージ、いや認識的なものが残っていたのだろうか。どちらにせよ俺に出来ることは無い、生憎と今回の件は悪いと言う認識が無い。謝る気はさらさら無い俺はとりあえず夕飯でも食べるかと、宿屋の主人に声をかけ酒場に向かうことにした。

夜、昼間と違い少しだけ冷えた風が頬を叩く。魔法の光り、というよりシステムの光りで通りを照らす街灯がぼんやりと存在を主張している。通りを歩く人々の喧騒が耳に聞こえる。ギルド登録者の人間から名行方不明になり、憲兵が見回りをしている、と。

D i v e 9

酒場は情報の元、それはどのゲームでも一緒だろう。それはヤウエの世界でも変わらない。

クエストの開始から、スキルの獲得、そして今居るザヴァルの酒場もその一つだ。

茶色のポニーテールを揺らしてあちらこちらを駆け回る少女が視界に入る。この酒場の看板娘であるカリーナだ。彼女から得ることが出来る料理スキルもあり、クエストもあり、とMMO時代ではなかなかの人気を誇った少女である。この世界も同様かは分からないが。

とりあえず開いている席に座り、周りを見渡す。冒険者風の男から、傭兵風の男、そんな酒場の景色を見渡している所で彼女からの声がかかった。

「あのさ、落ち込んでるんだから普通放って置くべきじゃないの？
というか酒場に連れて来る普通？」

それはお前が俺のローブのフードに入っていたのが悪い。

「なんかもう落ち込んでる自分が馬鹿みたいよ……」

そう話すのはフードからもそもそと這い出てきたフェリだ。彼女が言うように別に構う気も無かったし放って置くつもりだったがフードの中に居たので、それを着込んだ俺に付いて来たと言うことだ。正直知った事ではない、文句があるならベットの上で落ち込めと言いたい。そんな事を考えている所で噂の看板娘から声がかかった。

「あら、お客さん見ない顔ね？ ご注文はお決まり？」

メニューをポン、と渡して聞いてくる少女、年は15、6くらいの設定だったか。動きやすい服装にエプロンを付けた彼女がニコニコと微笑みながら聞いて来る。

「ああ、最近ここに着てな。とりあえず適当に食べれるものを、肉類にしてくれ」

渡されたメニューを開きもせずそう答える。あとこいつにミルク

でも持ってきてくれと机の上でふてくされているフェリを指差す。

「へえええ、フェアリー族？ はじめて見たわ、本当に存在してたのね」

テーブルの上で不貞腐れているフェリをまじまじと見つめるカリーナ。どこか居心地悪そうに顔を背け、耐えられなくなったのか俺のローブについているフード、もはや彼女の定位置となった場所に逃げ込んだ。

「ありや、嫌われちゃった？」

「さあな、そんな事よりさっさと飯を寄越せ、それがアンタの仕事だろう」

うつ、と呻きながら厨房に戻っていった彼女。中に居る主人に声をかけている。おそらく料理スキルでポン、と直ぐに出来るのだろうが。

「はい！ お待ちどう」

やはり予想通り、ものの10秒で料理が出来てきた。さすがゲーム、料理スキルのキャストタイムだけで出来上がるとは便利なものだ。目の前にはパン、そしてサウンドボードのから揚げと、ウッドステイツチのサラダが並んでいた。どう考えても元モンスターなのだが、その辺はいいのだろうか？ いやいいだろう、そうやってこの世界は成り立っているのだから。正直味は普通のパンと鳥のから揚げとレタスだった。

ミルクが届いたと同時にまたフードから這い出てちびちびとミルク

クを飲むフェリ。その光景をちらちらを見ている人があちらこちらに見える。おそらくフェアリーが珍しいのだろう、おそらく、だが同時に俺の顔を見て視線を逸らす人も居るのだが。そういえば俺の顔は強面だったな、と思い出す。

出された食事を平らげた後、その場を後にする。料金は1800リブ、酒も頼んだのでまあ順当な所だろう。システムコンソールをポップ、そこからリブを取り出しテーブルの上に置いてその場を後にする。所詮本当に腹が膨れているわけではないのだろうが、空腹感が有る以上食事は取らなければならない、そして睡眠も、だ。

またフードの中に引っ込んでしまったフェリを連れて宿屋に戻る事にした。

「あ、やべえ、すっかり忘れてた」

次の日の朝、宿屋でシステムコンソールを開き、アイテム整理をしている所でクエスト欄に点滅している項目がある事を発見する。それは昨日ギルドで手に入れてきた手配書クエストだ、例の尾行者の件ですっかり忘れていた。フェリが後ろでため息を付いているのがわかる。ちなみに彼女も結局あの後普通に喋るようになった。自分はやっぱり貴方みたいになれないけど、でも違うといえるだけの物がないから、と。

あ、そう。って答えたらとび蹴りが飛んできた、俺が悪いのだからか。

「さつさと処理してくるか」

思い立ったが吉日ではないが、ギルドランクを上げておく必要がある。ローブを着込み、外へ出た。

【白虎】に乗って数分、城塞都市ヴァルファニアから離れ、森の中に入る。手配書はグリズリーとハラウエス、前者は先日ぶちのめした相手で後者は植物系モンスターだ。索敵も兼ねて小さなフェレットを召喚する。

召喚スキルLv30【白鼬】

直径1m程の魔方陣が地面に現れ、そこに小さなフェレット、白鼬が現れる。攻撃能力も無ければ防御スキルの何も無い、だがこの召喚獣はモンスターを索敵してくれるのだ。敵対値を下げるカルフマインのローブを脱いでインベントリに突っ込む。そしてその数分後、無事出会うことの出来たグリズリーをぶちのめした。

「ヴァルファニアで稼げるといえばこの程度か、空中都市グランバニルや、いつその事魔界に行っても良いが、逆にそこまで行くが目立つよな」

「インベントリに入ってたアイテムは？ ってまあ無理か、どう考えても場違いなアイテムだらけなものね」

「めんどくせえ事この上ないな。そつだ宿暮らしもあれだし家を建てるか。たしか土地購入も出来ただろう」

「そつね、ヴァルファニアなら城の土地管理人に話せば問題ないはずよ」

ではそつするか、と結論づけ。とりあえず受けてきた分の手配書

はさっさと処理するか、と再度【白駒】を呼び出した。

ヤーウエの世界では土地の購入が可能である。城塞都市であればその土地管理部門、村や町なら村長や町長に必要なお金を払い買うことができる。そこに自分好みの家を立て、家具などを揃えることができる。合衆国と同程度の広さを持つヤーウエでは馬鹿みたいにでかい城を作る者もいれば、いくつもの家を作り簡易的な町を作り出す者もいた。

「3億くらいだったか？ 離れた郊外ならもう少し値段を落とせるか」

ふむ、と考えながらテストターの時の記憶を呼び起こす。テストターの時はバグ確認の為にだけに支給された金で購入し、売却しを繰り返して頂けなので大してその家を楽しんだ覚えはない。どちらにせよ後で考えれば良いだろうと思ったところで誰かの悲鳴が聞こえてきた。

「エイス、今の聞こえた？」

「ああ、聞こえたな」

そう答えた後、先ほどと同様に【白駒】に指示を出し次のターゲットを索敵しようとする。正直悲鳴を上げようが知った事ではない。助ける義理もないし、助ける意味もないし、助ける価値も無い。くあ、と欠伸をした後次の標的が出てくるのを待つのが、が。

「この馬鹿！ 普通はそこで助けに行くものでしょう！」

「あ？ なんで俺がそんな面倒くさい事を」

「ああ、もう！ ほら、すごい美人かも」

「興味ないな」

「お金が手に入るとか！」

「間に合ってる」

「もう馬鹿！ 私が行って来る！」

「勝手にしろ」

と、言った所で次の標的が出てきた、残念ながら目的のターゲットではなかったが一撃でそいつをぶちのめした後、悲鳴が聞こえた方に飛んで言ったフェリの後姿を見た。

あの馬鹿、あの馬鹿、あの馬鹿！ 涙が滲む、そうだわかっていた、そういう男だ、ああいう男だった。小さくなってしまった体を必死に動かしながら悲鳴が聞こえた場所へ向かう。テスターの時とは違い今の私は何の力も無い、でも、それでも自分が作った子供達が危険に晒されているのならば助けに行こうと言う気持ちを抑えることは出来なかった。あの馬鹿がいれば、もはや極悪非道の最低人間野郎で十分だが、あんな男が彼氏だったなんて本当に冗談ではない、でも好きなんだからしょうがない。まったくもってやってられない話だ。

ぐん、と高度を上げて空を飛ぶフェリ、蝶々の羽に似たその背中

から生える羽からキラキラと光を発しながら飛んでいく。そしてすぐにモンスターに襲われている女の子を発見した。

目の前にいたのは13歳くらいの少女と黒い毛皮に覆われた熊の様なモンスター、ブラックグリズリーだ。そのモンスターは新人の騎士ならば5人でPTを組んで倒すようなモンスター。なぜこんな森の手前にいるのか疑問であり、それと同時にこんな森になぜ少女が一人にいるのかという疑問も出てきたが、兎にも角にもこのままでは彼女は殺されてしまう。効果があるかは疑問だが、その黒い毛皮に覆われた顔面にドロップキックをかます事にした。

「こんのおっ！」

ボスン、というかわいらしい音がしてその深い毛皮に足が刺さる。そしてきよきよと周りを見回すブラックグリズリー、私の姿を確認したのか、していないのか。いや、間違いなくしたと思うのだが、何事も無かったかのように少女に視線を戻し攻撃を再開しようとした。どうやらダメージ0、むしろミスとか出てきそうな勢いだ。くそ、と思わず悪態を付き、その凶悪な爪を振り下ろそうとしている前に飛び出て腰が抜けている少女を強引に攻撃範囲から引き剥がす。

空振りした爪、そしてその凶悪な腕が地面を砕き、砂と石が舞う。あんなのが直撃したらこの少女は即死だ、私だって即死だ。死の恐怖が全身を覆う、冗談じゃない、こんな所で、こんな所でまた殺されて溜まるか。ぼろぼろと泣きながら腰が抜けてしまっている少女に必死に呼びかける、ここには間違いなく死ぬ、そう間違いなく死ぬのだから。

「しっかりして！ 逃げるわよ！」

ショートカットの赤毛の女の子、その髪を必死に引っ張る。ようやくずりずりへと逃げる事を意識したのだが致命的に遅すぎる。そして再度振り下ろされた腕が少女に振るわれる。

「いや、いやああああ」

「こんのっ!」

ぐい、っと全身を使ってその攻撃範囲から彼女を動かす。ブラックグリズリーの攻撃パターンは記憶している、いや、エイスから聞いたのを覚えている。ブラックグリズリーの攻撃は振り下ろし、横薙ぎ、噛み付き、体当たりの4種類のみ。その中で一番注意しなくてはならないのは噛み付きであるが、これはHPが半分以下になつてから行ってくる攻撃スキル、そして体当たりは一定以上の距離が離れていると使われるスキル。となると注意すべきは振り下ろしと横薙ぎ。そして横薙ぎ攻撃の前には必ずうなり声をあげるので……。

「これも振り下ろしっ!」

よいしょっ、と少女の体を必死に動かす。腰が抜けてしまっているが、動く腕と頭と、なんとか駆使して指示を出す。ギリギリで繰り返される必死の攻防、いや攻撃はしていないから回避か。しかしこんな事何度も続けられるものではない。次第に少女の体力は落ちていき、私の体力は落ちていき、そして最後は間違いなく死ぬ。だから、だから、私はあの馬鹿野郎を頼るしかないのだ、あの最低最悪の極悪非道の大馬鹿野郎の恋人に。

ぐるぐる、とうなり声を上げるブラックグリズリー、来た、横薙ぎだ。これは倒れて避すしかない。屈んで! と声を張り上げて

少女が屈んだ数秒後、頭の上を轟音と共に腕が爪が振り抜かれる。だが問題はこの後にあった、横なぎをした後にすぐに振り下ろし攻撃が始まったのだ。

「な、まさか連続攻撃」

これは駄目だ、これは避けようが無い、ああ、こんな所で死ぬなんて。ただのデータベースに蓄積された私の記憶、それを元に構築された一種のAIに過ぎないのにまるで今までの思い出が走馬灯の様……。

「どけ」

冷淡な声が森に響く。同時にドゴツ、という鈍い音が森に響き、振り下ろし攻撃をしようとしていたブラックグリズリーが吹き飛ばす。そこにはヤクザキツクの如き蹴りをかましていたエイスが立っていた。

呆然とする私。そして涙と鼻水でぐちゃぐちゃになってしまった顔をそのままに、驚きのあまり硬直している少女。そんな私達を見て彼は呟く。

「美人でもなければ金もなさそうだな」

はっ、と鼻で笑ったその顔を全力で殴りに行った私は悪くないだろう。

D i v e 1 0

ヤウエに存在しているモンスターは攻撃アルゴリズム、攻撃パターンが設定されている。それはスキルの数から効果から、そして連続攻撃のパターンから攻撃する前の仕草から、だ。

ゲーム内部でその攻撃パターンを記載されているモンスタースキルを購入する事が出来たが、この世界ではそれを取り扱うNPCはいない。とはいえ、自分が作ったプログラムだ、大体の所は覚えていたのだが。

通常攻撃にすぎないヤクザキツク風のただの前蹴り。ステータス補正とレベル補正によりふきとばされたブラックグリズリーはHPバーを一気に削り取られ、豪快に吹き飛びながら霧となり拡散し、Dropアイテムがそこに残った。人と違いモンスターは蘇生魔法適用タイムは無いのだ。

顔面に向かって半泣きで殴りかかってきたフェリを格闘家モンクのパッシブスキル体裁きで自動回避後ぱいと後ろに放り投げる。そして目の前で鼻水と、涙と、そして土やら埃やらで汚くなった少女に目を向けた。

この少女を売れば金になるか？

「おい」

今だ呆然とこちらを見上げている少女に声をかける。ショートカツトの赤髪はぼさぼさで、小枝がささって葉がくっ付いている。何が起こったのか理解できていないのか、何も答えてこない。めんどくさくなったので襟首を掴み上げ肩に背負った、というよりひっつけた。

「へあっ」

変な声を出す、少女こと荷物。放り投げたフェリから、女性をまるで物みたいにあつかうんじゃないー！ と、苦情の声が聞こえるが知った事ではない。

「ヴァルフアニアのギルドに放り投げとけば後は勝手にやってくれらるだろ、それでいいんだろ？」

目の前を飛び回りながらギャアギャア叫び続けるフェリにそう伝える。何でこんな所に少女がいるのか、とかそんな事は正直如何で

も良いし関係ない。家を探す気もないし、どうせ報告でギルドに行くつもりだったのでついでに過ぎないのだ。

「この最低！ 馬鹿！ 死ね！」

そう言えばリアルでも良く言われたなあ、と思い出しながら【白虎】を呼び出す。【白虎】が現れた瞬間、肩に乗っていた少女がビクリと震え、硬直する。どうやら敵と思ったのか、それとも得体の知れないものに驚いたか、どちらにせよ説明する気もないのでそのふかふかの毛が生えた背中に少女を放り投げる。バフ、という音が相応しいくらいに顔面から背に突っ込んだ少女を【白虎】は受け止め、主人よそれはあんまりではないか、と言いたそうな目を向けてくる。フェリも同じような目をしている。

「手配書は全部終わった、さつさと帰るぞ」

そんな視線を物ともせず、先を促す。適当な素材も割りと集まっただし採集クエストもある程度処理できるだろう。上手くいけばドラックくらいにはなれるかもしれない。

顔面から突っ込みまた半泣きになっていた少女を前のほうに座るように押し出し、ヴァルファニアに向かうように指示を出した。

「きゃああつ、ひあつ、きゃつ、ああ、いだっ！」

走り出した途端騒ぎ出す少女、あんまりにも煩いのでゴン、と拳骨を食らわせる。当然本気ではない、さすがの俺もこういった相手を殺すほど落ちぶれてない。今度は頭を押さえて泣き出した、はあ、とため息を付く。これだから餓鬼はめんどくさいんだ、やってられん。そう呟いた俺にアンタも十分餓鬼よ、とフェリが呟いてきた。

ものの数分でヴァルファニアの近郊に付いたので【白虎】から降りて帰還させる。しかしいつまでもぐずっていてそこを動かない赤

毛の少女。めんどくさいので襟首を掴み引きずっていく事にした。途中まさか警備兵に捕まることになるとは思わずに。確かに、俺の顔で少女を引きずっているこの光景は誰がどう見ても誘拐犯だろう。

「き、貴様！ 白昼堂々誘拐とは！ 応援を呼べ！ 逃がすなよ！」

大通りを暫く歩いた後にかげられた最初の言葉。そしてようやく気付いた自分の状況。まったくもってやってられない、こちらとら人命救助をした上、善意でギルドに連れて行ってやるうとしているのにこの結果とは。本当にやってられん。

「エイス、これはさすがに私もアンタが100%どころか200%くらい悪いと思うわよ……」

「この馬鹿共が短絡思考過ぎるんだろうが」

「それをアンタに言われたくは無いと思うわ」

ため息を付くフェリを横目に、周囲を囲む兵士を睨む。ついには引きずっていた少女が助けて、と叫びだした。人が助けてやったのにその態度とは舐めきってるな。まあ、いいそれなら望みどおり助けてやるう。

「おらっ」

右手に掴んでいた少女を兵士の一人に放り投げる、危なげにキヤツチした兵士。直ぐに周りにいた人々に介抱される。サンドラさんところのお嬢さんじゃない！ という声も聞こえる事からもう問題ないだろう。おそらくだが。

「さて、一応状況の説明をしたほうが良いかな？」

こきりと指を鳴らし、目の前に立ち剣を向けてくる兵士に声をかける。

「ふざけるな！ 誘拐犯の話など聞くか！ おい全員で捕らえるぞ！ 相手は呪術師だ詠唱の暇さえ与えなければ問題無い！」
おそらく装備しているローブや、中に着込んでる服装で判断したのだろう。まあ、中に来ている服はテスターの時に強化しつくしたあほみたいなスペックを持った呪術師の装備なのだが。これについては追々語ろう。

「ふむ、聞く耳持たずってことか、まあ構わんがね」

剣を振りかぶって攻撃を加えてくる兵士を体裁きで自動回避、そしてその腹に一撃を加えた。

ドゴオオオオン

後ろにあった家の壁をぶち抜き、備え付けられていた家具を吹き飛ばし、そして反対側の壁をぶち抜いて通りを転がってようやく止まったその兵士。格闘家Lv200スキル【天昇撃】、スタン性能を持ったスキルで、効果はスタン6秒、ステータス補正によるノックバックダメージである。そう、この攻撃では止めを刺すことが出来ないのが特徴である。

そして止まる時間、固まる空気。そこに居た人々も、彼を囲んでいた兵士も何が起こったのか分からない、いや、起こったことを理解できていない。まさに理不尽、まさに理解不能、最悪いや、災害がそこに存在していた。

「殺すとフェリがうるせえからな、程々にしておいてやるよ」

にやりと笑い、他の兵士に視線を移す。視線があつた兵士はびくりと震え、一歩後ずさるのが目に見える。

「ば、ばかな、呪術師だろう!？」

「人が、人が吹き飛んだぞ！」

騒然とする大通り、彼を囲っていた兵士が全員警戒するように後ずさる。

「言っとくが、俺は説明をしようとしたんだぜ？ それに対して先に攻撃してきたのはめえらだ。覚悟は出来てるんだろうな？」

じやり、と一步先に出る、それとあわせて一步下がる兵士達。さて、コンボで蹴散らしてさっさとギルドに報告に言つて家をおかわねえとな、と考えている所で良く通る、そして芯の有る女性の声が大通りに響き渡った。

「何をしているっ！」

凜とした姿、透き通る声、金色のウェーブがかかったバストトップで切りそろえられた髪、整った顔。身を包む銀の鎧は麗美な装飾が成されており、左肩にかかるそのマントは騎士Lv100スキル【聖戦騎士】のスキル持ちである事をあらわしている。HP+1500、MP+1500の補正をもったパッシブスキル。それを持つ騎士はこの街には一人しかいない。ヴァルファニア最強の騎士、ヴァルファニア騎士団の騎士団長ラニア＝フォドリゲスである。

「団長！ 実は誘拐犯の拘束を……！」

「なに？」

誘拐犯という言葉と包囲されている俺の立居地を見て状況を理解したのだろう、厳しい視線を向けてこちらを睨む。

「その男、それは本当か？」

「あん？ そいつがそう言ったのならそうなんじゃねえのか？ 俺はどちらでもかまわねえよ、悪いがやる事があるんだ、邪魔するならためえもぶちのめすまでだ」

俺の返事に眉を潜め、状況の確認の為か傍にいた騎士に再度声をかけている。民衆に保護された少女を指差して説明している、騎士団長は何度か頷いた後こちらに再度向き直り、声をかけてきた。

「状況は分かった、悪いが詰め所まで来てもらおうか。事情を説明してもらいたい」

「お前は馬鹿か？ その胸と同様に脳みそが頭に詰まってないのか？ 俺はやる事があると言っただろ。あんた等の妄想と妄言に付き合っている暇は無い」

肩を竦めて鼻で笑い答える。同時に騎士団長である彼女のこめかみに青筋が浮んだ。どうやらコンプレックスなのだろうか、テストーでは特にクエストを受けるだけの相手だったので大して気にもしていなかったが、2chではかなり人気があったNPCだ。ちなみに結婚したいヤーウエキヤクターの上位ランキングの一人であった。

「ほお……、ずいぶんな事を言ってくれるものだな。我等ヴァルフアニア騎士団と敵対するつもりか？」

ギチリと腰に吊るしていた剣の鞘を掴むラニア、少しだけ抜かれた刀身が日の光を反射し、輝いて見える。

「するもなにもためえらから喧嘩売ってきたんだろうが。それを俺は買っただけの話だ」

みしり、と空気に輝が入る感覚に囚われる。生憎と重戦士のスキル【威圧】などといった便利なものは無い。そういえば騎士団に手を出したら街に住むことは難しくなるんだっただろうか。いや、そん

な設定はした覚えは無いがどうだったかな、とまるで他所事のように考えながら相手の出方を待った。

そんな一触即発の状況で間の抜けた声が響き渡った。

「ちよおおおつと、まったあああああ！」

灰色のローブ、カルフマインのローブにつけられたフードの中から一人の、いや一匹のフェアリーが飛び出し、左手を腰に、右手を前に。この印籠が、とても良いそうな雰囲気であと騎士団長の間立ちふさがった。

「む、フェアリー、だと？」

突然飛び出したフェアリー族の彼女、フェアリーの出現に固まる騎士団長、そして周りの人々。警戒している様子は変わらないが、完全に注意はフェアリに逸れている。そんな状態の騎士団長に何をするかと思つたら、突然ガバツとても効果音が付きそうなほど頭を下げて叫びだした。

「ほんとすいません！　うちの馬鹿が本当にすいません！　事情は私の方から説明しますのでどうかここは落ち着いていただければと……！」

まるで空中で土下座するがごとく頭をぺこぺここと下げ、謝り出した。平に平にご容赦を〜って、お前時代劇でも見たことでもあるのか……、とまでのテンションだ。だがしかしそれは気に入らない、なぜこいつに謝らなければならない、こっちは善意である餓鬼を助けてやったと言うのに。

「おい、フェアリ。こんな男女に謝罪する必要はねえぞ、先に手を出してきたのは向こうだ」

「アンタは黙ってるおおお！ ややくしくなるからしゃべるな、話すな、息するなああ！」

疑問を告げるがまるで顔だけでかくなつたかと錯覚するほどの勢いで怒鳴られる。その勢いに押され、思わずたじろいでしまう。普段怒らない人が怒ると恐ろしいというのは本当の様だ。

「いや、それはさすがに死ぬと思うが……」

結局ぼそりと反撃する程度しか俺は喋ることができなかった。

D i v e 1 1

ヤウエの世界の建物には耐久値が設定しており、一定以上のダメージを与えると壊れるようになっていく。

高性能の素材、高価な素材、そういったものを使えば使うほど耐久値は上がり、逆はその然りである。

エンチャントと言われる魔術的補正を加えることも可能であり、これは付与術士と言われるサブ職業のスキルになる。

テストの時にさまざまなサブ職業の試験運用も行っており、氷山リヨウ、もといエイスは鍛冶師、付与術士、建築士、採掘士等の職業を収めていた。

付与術士は既に述べたが、鍛冶師は武器、防具、杖、槍、盾、そして何故か呪術師の武器である魔導書も鍛冶師が作成できた。見た目明らかな分厚くてでかい本なのだが。ゲームだから、で済まされるにしてももうちょっと設定を考えなかったのだろうかとも思う。

採掘士は鍛冶師で使われる、また裁縫士や装飾士が使えるような宝石から鉱石などを大地から採集できる職業である。

この職業が無ければ、この世界に存在し、ランダム配置されている鉱石もしくは宝石を発見しても採掘ができない。また、高価なものほどこの採掘士のレベルが高くなければ採掘できない。

薬草などを採集する採集士も同様なのだが、こちらはフェリのキラクターが育てていたのでエイスは持っていない。回復役でバツファー役であった彼女が居なくなつた以上ソロが常となるためそういった採集レベルも上げておくべきだろうとは思っているようだが。

そして最後に建築士、これは建物を作るためのサブ職業だ。これは建物の補修から建築まで出来る職業でレベルが上がれば上がるほど、立派で大きなものが作ることが出来る。基本となる建物は建築士のスキルを売っている建築士センターに行く必要があるのだが、テスターだった彼のスキル欄には全ての建築スキルが所持されている。

その建物はプレイヤーが作れるもの、とゲームマスターしか作れないものがあった。前者は先に述べたが耐久値が設定される物、後者はそれが無いものだ。

後者が作った建築物は壊れてはいけない建物として世界に認識され、ダメージが通らないように設定されており、どんなに攻撃を加えても not break としか表記されない。

ヴァルファニアの城であったり、城壁であったりがそうなのだが、その保護プログラムから切り離されたこの世界ではどうなのかは分からない。

D i v e 1 1

騎士団長

「なぜ俺まで……」

後ろでいまだぶつぶつと文句を言っているエイスを放って詰め所の一室で説明をしているフェリ。出されたミルクを行儀良く飲みながら騎士団長である彼女と事情の説明と先ほどの対応の謝罪を述べていた。

「本当に申し訳ありませんでした。私の方からもきつく言っておきますので……」

背から生えている羽を萎らせ、しずしずと頭を下げてくるフェアリー族の彼女。先ほどから何度も聞いている言葉だ。

「構わんさ、最初の対応にも問題があった。状況は理解した、さきほど保護された少女からも同様の話が聞けたしな。とはいえ君は大分嫌われたようだが？」

と、出されたコーヒーに一口もつけず、いらいらとした様子で椅子に座る男に声をかける。

髪はアッシュブロンドのオールバック。左目の上には切り傷らしき傷が大きく刻まれており、目は鋭く鷹の様。体格はそこそこの良いようだが、我等騎士団ほどではない。着込んでいるローブを脱ぎ、黒を貴重とした独特の服を纏っている。背には大きな魔方陣が刺繍されて居る事から魔術系の装備だと思われる。金糸で編まれた刺繍

の様なのでかなり立派なものだと予想できるのだが。

どちらにせよ見た目は完全な呪術師、攻撃系魔法を用いる職業の
はずだ。しかし部下が攻撃された時彼が使ったのは素手だ、正直ど
うやって素手で吹き飛ばしたのか疑問が尽きない。

また、フェアリーを連れて居る事からさらに何者なのか追及した
いところだが、どうにもこうにも機嫌が最高潮で悪いようだ。むし
るなぜこんな男にフェリ、と名乗った彼女が付いているのかわから
ない。かなり苦労しているのは今までのやり取りで分かったのだが。

「何だ？」

じつと見ていたのが気に触ったか、不機嫌な顔を隠そうともせず
にこちらを睨みつけてくる。いやはや、まるで野良犬だな、誰にで
も噛み付きそうな男だ。あんまりこの街で問題を起こされると困る
のだから。

「エイス、と言ったな。こちらの対応が悪かったことは認めよう。
だがしかし暴力だけでは何も解決しない、それを良く学ぶのだな。
それとこの街であまり問題を起こすな、我等とて暇ではないのだからな」

「はっ、しるかよぶっ」

肩を竦めて鼻で笑い発言した途中でフェリが体全身を使って口を
塞ぐ。このぼけ、ばか、あほ、とか騒いでいるのが聞こえる。いや
はや、本当に苦労してそうだ。

その後、簡単な調書を作成、彼等は開放となった。

彼はヒューマン族の呪術師、そう呪術師である事は間違いなかったよなのだ。冒険者ランクはEとの事だ、正直信じられない。彼の力量でEなどと言ったらどれだけの冒険者がEランクどころかE以下になっってしまう。まあ、まったくクエストを処理していないのなら話は別なのだが……。

結局最後まで不機嫌顔だった彼を詰め所から送り出した後、入口の前でそう思ったのだった。

「いつまで不貞腐れてるのよ」

「はあ、別に不貞腐れてねえっつーの。もう済んだ事だしどうでも良い、さっさと土地購入をして家を建ててしまおう」

「ずんずんと灰色のロープをはためかせて前を進むイスに声をかけるフェリ。ぴたりと止まったかと思えば疲れた顔で振り返りそう答えてきた。どうやら彼的にも悪いという意識はあったようだ。たぶんだが……。」

「とりあえずクエスト報告が先だな、いくぞ」

肩で風を切って歩くが如く、騎士団の敷地から出て行く。出る際兵士数名から睨まれていたが何処吹く風だ、門の近くに立っていた兵士に向かっても、どけ、の一言で出て行った。もうすこし言い方というものが無いのだろうか。

そのあと直ぐにギルドに到着、受付嬢のリーアから苦笑され、貴

方も大変ねと言われてしまった。そうだ、大変なのだ、是非この馬鹿にはその苦勞の1割でも理解して欲しいものだ。手配書の処理確認が押された紙切れを受付に渡しているエイスを睨みながら思う。やはりこの男にエイスの体に入れたのは失敗だっただろうか、いやしかしあの状況でマッチングが早かったのはこれだけだ、仕方が無かったのだ。

はあ、とため息を付きながら報告を終わるのを待つ。同時に採集クエも数個同時に処理しているようで、驚くリーアの声が聞こえる。そしてどうやら無事Dランクに上がったようだ。こんな短期間でランクアップする人なんて初めてです。と感嘆の声を上げられている。

「是非今後もおねがいますねっ！」

「断る」

満面の笑みでにこやかにしゃべるリーアに無表情無愛想の声で一言。ばっさりざっくり断るエイス、もう少し言い方が、というか絶対さっきの件引きずっている、絶対だ。本当に心の狭い男だ……。

「あー、ごめんねリーア。暇を見つけてまた来るから」

「うんうん、大丈夫よ。もっと理不尽な人も来るからね、かわいいものよ」

かわいいものよ、の発言でピクリと眉を動かすエイス。さっさと行くぞと吐き捨て、ギルドを出て行ってしまった。苦笑する彼女に手を振り私も後を追いかけた。

次に向かったのは土地購入管理人の場所、郊外に家を立てるつもりなのだ。配置が変わっていない為、直ぐに目的のキャラクターを発見、土地の購入を行った。金額は2億リブ、たとえ郊外といえ城

塞都市ヴァルファニアの近く、この位は当然だろう。特に何も文句を言わず購入する。目の前に一枚の紙切れが出現し、その右下にサインする。ポンと軽快な電子音が鳴り、システムコンソールの所持物件一覧に項目が追加されるのを確認した。

ヤーウエの世界では土地購入は何回でも出来る、だがしかし2回目の購入から金額が割高になる。単純に倍々していくのだ。これは一人のプレイヤーがいくつもの土地を独占するを防ぐ意味がある。また所有している土地に対しての所有税が発生する。これは土地の価格の1%に過ぎないのだが、3ヶ月以上支払いが行われない場合、土地の回収が行われてしまう。登録抹消ということだ。これは長期ログインしなくなった者に対しての処置である。当然事前に運営会社に連絡をすればある程度融通してくれるがそれでも最長半年だ。

まあ、一生この世界に居るであろう彼らには関係の無い話しかもしれないが。

「さて、と。やるか」

「どんなのにするの？ 建築スキルは全部登録してたよね？」

「最初は合衆国に居たときの様な形にしようかと思っただが、せつかくだしな、日本風にする事にした」

「え？ほんと！ 私日本庭園とか夢だったんだあ」

目をキラキラさせてはしゃぐ彼女を横目にシステムコンソールの中の建築スキル一覧をスクロールし、目的のスキルをタップする。必要な素材が表記され、足りないところは赤字、足りているところは白字で表記されている。テストの時にいろいろ作れるために建築素材は大量にストックされているので問題は無い。すべて白字で

表記されている事を確認した後、下に表示されていた確認ボタンをタップする。

すると長方形の巨大なカーソルが表示された。指を動かすとそのカーソルが移動する。これは建築する場所の指定であり、このカーソルを置いた所に一定時間のキャストタイムを使い家がつくられる。土地管理人から購入した土地の上にカーソルを持って行くと、設置可能です。のシステムポップが表示され、その後、最終確認ボタンを押した。

まるで魔法のように素材が空中で研磨され削られ、そして組み立て上げられていく。インベントリから取り出して建築場所の中央においていた素材は宙を舞い、宙を踊りどんどんと形を作り上げていく。今回選んだのは日本屋敷 `Version 3` である。

瓦の屋根の2階建ての建物、2階は12畳の部屋が4つ、1階は24畳の部屋が二つ10畳の部屋が二つ。囲炉裏が付いており、そして素材置き場として使う予定の10畳程度の地下室が付いている。庭は石庭と松が生えており、小さな池と鹿威し、中には鯉が3匹ほど泳いでいる。そしてこの屋敷の最大の特徴、屋敷の一部が鍛冶場となっており、大仰な窯がそこに鎮座していた。

出来上がるまでおよそ4時間。本来であれば16時間かかる建造物であるが、建築士のマスターである彼は建築短縮スキルを取得しているのでそれだけの時間で済んだ。それにしてもなかなかの時間なのだが。

信じられない速度で出来上がっていく建造物。おそらくヴァルフニアにここまでの建築士はいないこと間違いない状況、たとえ郊外といえどその異様な光景に何人かの野次馬が気付いたらできていた。

強面の顔に怖気づいたのかどうかはわからないが、声をかけてこないで、というか声をかけてきたとしても違いは無かったかもしれないが、周りに集まっていた野次馬を無視して屋敷の中に入る。これようやく落ち着けるな、と思いつながら。

「きゃー石庭！ 石庭じゃない！ 整備いらずのゲームでこそよねえ。って鍛冶場？ なんで？」

屋敷に入ると同時に騒ぎ出すフェリ、入り口の門を潜り、石畳の通路の横に広がる石庭、そしてその反対側に鎮座する窯を見てそう話した。

「まあ、一応な。この街は騎士が多いだろう。ヴァルフニアだしな、鍛冶は使えるだろう。まあ気に入った奴にしか作るつもりは無いがな」

「あなたが気に入ることなんて有るの……？」

「さあな」

右手を振り上げフェリに返事した後、玄関、木造の引き戸を開けて中に入る。靴を脱げよ、とフェリに伝えたが、そういえば空を飛んでいるから関係ないかと思いつき、先へ進む。廊下は木造の床、壁は漆喰、引き戸は障子とまさに日本屋敷の内部である。

適当に部屋を空けるがそこには畳が敷かれているだけで何も無い。家具は追々集める必要があるだろう、家具職人のスキルは他の二人の担当だったので買うしかない。あとはトイレと風呂だけ和風以外に洋風のを作っておきたいな、と石庭の上ではしゃぐフェリを見ながらそう考えた。

D i v e 1 2

ヤーウエの世界ではアイテムをインベントリから出すとシステムコンソールの中にあつたようなデフォルメの形ではなく、リアルな素材として出現する。

インベントリを圧迫していた素材系アイテムを、建てた屋敷の地下に設置した棚に並べることにした。とはいっても建築素材は殆ど要らないであろう事から、売っても問題なさそうな素材は売り払つたので、ここにあるのは鍛冶系の素材アイテムなのだ。

「これでは地下室は直ぐに埋まってしまふな、別途倉庫を作る事にするか」

薄暗い地下室の中でそう呟くエイス。目の前には大量の鉄鋼石、鋼、鋼鉄、柄素材、等々が大量に置かれている。どちらにせよ将来的に作り上げた武器、防具類を置く為のスペースも必要となつてくるのだ。10畳程度の倉庫ならキャストタイム10分程で作れるだろうし、満杯になつてからでも良いだろうと考えたエイスはその薄暗い地下室から外へ出るのだった。

ヤーウエの世界の鍛冶師というサブ職業。その職業は名前の通り
武器の製作から修理、分解などを行う職業である。ドロップ品の武
器と違い、製作された武器は一定の確率でレア、所謂通常より性能
が高い武器、ないしは防具が作られるというメリットがあった。ま
た、その武器に製作者の銘を入れることが出来、鍛冶職人一本でヤ
ーウエの世界を楽しんでいた人も居たくらいだ。

武器を製作する事で経験値も得ることが出来たので武器作成だけ
でそこそこのレベルだった人も居る。まあ、この世界では戦い慣れ
る、という事も必要だったので対モンスター戦で使えるかと言った
ら難しい所ではあったが。武器の製作はランダムに存在している採
掘で手に入るアイテムもそうだが、モンスターからドロップされる
アイテムも使う場合がある。以前ギルドで取引したアイテム、鍛冶
職人からの依頼があったことからわかるだろう。たしか簡単な投
げナイフの素材だった、と思い出しながらシステムコンソールをス
クロールさせ、目的の項目を見つける。

鍛冶師Lv20スキル【骨製ナイフ*20】（投げナイフに分類）
装備可能職業 騎士・重戦士・暗殺者・狙撃者・神聖術士
必要素材：ビックフツドの爪×1・ウルフウツドの牙*5

どうやらもの見事に装備できそうに無いアイテムだ、まあ装備できたとしてもするつもりは無いのだが。

正直こんな物を作ったところで意味がないし、どうせ店として大々的にやるつもりも無いので興味が無い。もし作るならこの辺だろうか、と目的のスキルをタップする。

鍛冶師Lv55スキル【ナイトランサー】（槍に分類）装備可能職業 騎士・重戦士

必要素材：鉄鋼石*30・銀*2・アルダングの鱗*5・ヴァリオギの根*5

鍛冶師Lv60スキル【ファルコバスター】（長剣に分類）装備可能職業 騎士・重戦士・暗殺者

必要素材：鉄鋼石*30・銀*5・フォンドウイフの爪*10・フォンドウイフの羽*5・ロツクタイトルの鱗*2

両方装備可能レベルは高い、新人騎士には装備できないかもしれないが、そんな奴等に売るつもりも無いので問題ないだろう。

必要素材を持ってきて、窯の傍でシステムコンソールをポップアップ。アイテムを釜の中につ込み目的のスキルを使用する。緑色のバーが表示され、数分後、見事な槍と剣が出来上がった。

「まあ、こんなものか。付与を付けてやっても良いが、正直このレベルの武器には勿体無い。このままで良いだろう。そもそも本当に売るかどうかも分からんしな」

鍛冶場に出来上がった武器を適当に立てかけ、無事スキルが発動する事を確認した俺は、折角だからともう少し何かを作ろうかな、と鍛冶場スキルのリストをスクロールする。

このヤージュエの世界では武具は装備可能レベルがある。性格には装備可能職業レベルだろうか。その必要レベルに達していないと制限を受け、性能の20%〜50%ダウンを受ける。その差はレベル差が大きければ大きいほどダウン制限は大きい。まあ、必要STR（力）が足りなくてそもそも持てないという場合もあるのだが。ちなみにレベル制限を解消する為のスキルもある、だが殆どの人は取らないだろう、ポイントが勿体無いからだ。たしかLv1で5までの装備制限無し、Lv2で10、Lv3で15だったか？ だが正直それならレベルを上げてしまった方が良い。3ポイントものスキルポイントは貴重なのだ。

そう考えながらスクロールをしていたところで一つの項目で指が止まる。

鍛冶師スキルLv100【ヴァルフエリオ・アインス】（特殊長剣に分類）装備可能職業 騎士・重戦士

必要素材：クリスタル金剛石*10・ダイヤモンド*1・ガルヴァインの心臓*1・トートの宝石セット*1

長剣の中でも特殊性能を持ち、Lv100の武器ながらレア性能を持つ武器として親しまれた剣だ。人によっては強化しまくりLv200近くでも使ってた人が居た。Lv300でもサブ武器として持っている人すら居たくらいだ。

その特性は魔法攻撃を吸収する事と、スキル使用時のMP消費をカットする事に有る。魔法ダメージの10%吸収、内5%HPMP変換という性能と、スキル使用MP半減という特性を持っているの

だ。10%の吸収は大きい、それが相手のダメージが大きければ大きいほど吸収量は増え、なおかつ回復できるので実質15%のダメージ減となるのだ。そしてスキル使用半減はスキルが基本となるこの世界ではともありがたい。常にスキルで消費されるMPを計算し、今の残りMPを考えながらスキルを組み立てるその自由度が広がるのだから。攻撃力だけ見ても同レベルの武器と比べて頭一つ抜き出ており、騎士、もしくは重戦士のキャラクターはこの武器をこぞって奪い合った。取引所では5億リブを超える価格が付いた事も有る。

この武器に目が留まると同時にあの騎士団長の顔を思い出す。ため息を付きながらどこか哀れんだ顔でこちらを見てくるあの女。はあ、とため息を付いた後くだらんと呟き鍛冶場を後にした。

「で、なんでてめえがここに居る……」

鍛冶場から戻った最初の一言、屋敷の一室、客間として作り上げたその部屋。簡易的な丸テーブルと箆笥が置かれ、開かれた襖からは石庭が見えている。

「友人に合いに着たらまずいのかね？」

おそらくフェリが出したのだらう、湯のみに注がれたお茶を飲んでいる女性。この城塞都市の騎士団長ラニア「フォドリゲス。ほう、これはなかなか、と言いながら出された菓子を摘んでいる。対面に座っているのはフェリ、まるでリスのように口を膨らませお菓子を突いている。

「誰がてめえの友人だ！」

「フェリだが？　もしかして君はフェリの友人関係に口を出すほど傲慢で、そしてその友人が訪ねてきては困るような事でもしているのか？」

首をかしげて答えてくる目の前の女。金色のウェーブがかった髪がさらりと流れ、日の光を反射しきらきらと輝いている。

「ちっ、勝手にしろ」

そう吐き捨て客間を後にする、と、後ろから声がかかった。

「ああ、まってくれ。君にも用件があるんだ」

「ああ？　悪いが俺には無い、じゃあな」

そう言い捨て今度こそその場を後にする。さきほど武器作成の時に彼女をイメージした事もありどこことなく居心地が悪く、胸糞悪い。ちっ、と舌打ちした後自室に戻る事にした。

「まったくもって合いも変わらず、いや分かりやすい男でもあるな」
くつくつく、と笑いながらフェリに同意を求めるラニア、その目じりは下がっており、微笑ましい者を見たかのような表情をしている。

「なんかごめんなさいラニアさん」

小さな体でぺこりと頭を下げるフェリ。彼女はきつと心の底から思っているだろう、彼女が大人でよかった、と。

「ラニアで良い、彼の性格はなんとなく分かった。正直城の貴族連中なんぞより余程好感が持てる」

手を自分の顔の前で振り、答えてくるラニア。貴族の部分で眉を潜めていたが、何か思うところがあるのだろうか。そう考えた所で

前回の尾行の件を思い出す。

「え？ 城の貴族？ そうか……、補正プログラムが効かなくなつたから持つている権力に酔ってしまつ人も出てきたのか……」

「ん？ 何のことだ？」

こちらの呟きが聞こえたか、何事かと聞いて来る。それに首を振つて答え話題をかえた。

「あ、ううん、なんでもないの。それよりエイズに用件つてなんだつたの？」

「前日の調べでブラックグリズリーを一撃で倒したと聞いてな。他の連中は恐怖のあまり幻覚でも見たのだからと言つ者も居るが、私はそうは思わない、部下の一人を吹き飛ばした力量を考えるとな」
話題変えに特に疑問を挟むことも無く、答えてくれるラニア。こ
ういう部分がまた大人だなあ、と思いながら彼女の話聞く。

話の内容は有る意味予想通りであり、考えられる懸案事項の一つでもあつた。唯一の救いとしては彼女が味方、と言つと微妙かもしれないがこちら側に立つてくれることだろう。

「なるほど」

「城塞都市としては彼の力量を把握しておきたいのさ、それに加えて彼が使えるのか使えないのか、そして味方なのか敵なのか、をね」
肩を竦めて話す彼女。確かにその通りで、正直そのくらいの事はされるのは当然であり、理解はしていたのが。それを馬鹿正直に話している物ではない。そしてそれが分からない彼女でもないと思うのだが。不思議に思つた私は聞き返す。

「そんなに正直に言っちゃって良いんですか？」

「構わないさ、彼は裏でこそこそやるより正直に話したほうが良いと思うからな」

それに対しての答えは簡潔。なるほど、大人だ、人を良く見ている。

「まあ、それは否定しませんが、彼使われることを嫌いますから。使いたいなら力づくでやれって言うと思いますよ」

「それは、なかなか骨が折れそうな事だ」

そう呟き彼女は庭の石庭に目を移し、残っていたお茶を飲み干した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9524t/>

Dive

2011年6月16日09時00分発行